

年次大会・例会研究発表の記録

[敬称略、身分は研究発表当時]

2014 年

第 6 回年次大会 (2014. 9. 7. 於日本大学芸術学部江古田校舎)

〈研究発表〉

ジョナサン・スウィフトの『桶物語』——その風刺の手法

青山学院大学非常勤講師 妹尾新太郎

今回のお話では、ジョナサン・スウィフトの『桶物語』を取り上げてみたいと思います。これは、架空の作者「三文文士」が書いた作品という設定のもとに、スウィフトがその「三文文士」の様々な言説を通して、当時の学者や文人たちの思潮やら、悪癖やら、無能振りやらを痛烈に風刺した傑作です。この空想上の作者「三文文士」にスウィフトは、どのような物の言い方をさせ、どのような形で当代の学識者を風刺し、揶揄しているのか、その手法を検証してみようというのが今般の私の話の主眼です。

バフチンは、「パロディー」を定義して、「物の像をあちこち伸ばしたり縮めたり捻ったりする歪んだ鏡」と呼びましたが、一言でいえば、「三文文士」というスウィフトが造形した架空の作者が果たしているのは、正にこの「歪んだ鏡」の機能であります。つまり、対象を想いのままに歪めて映し出すことによって、その対象を揶揄し、笑い物にするという仕組みです。そして、この歪曲の機能を生み出す根本原理として用いられているのが、古代ローマの原子論哲学者ルクレティウスの「表層の哲学」ないし「逆様の言説」なのです。その辺のところ今少し詳しくお話しさせていただきます。

(司会：早稲田大学非常勤講師 田村 裕二)

〈連続シンポジウム〉

「学問的知見を英語教育に活かす」

日本獣医生命科学大学専任講師 鴫崎 敏彦

学会の存在意義の 1 つに社会貢献があることは論を俟たない。そして、当学会が守備範囲としている諸分野の研究活動を社会に還元する有効な手段の 1 つに、その研究成果の英語教育への応用が挙げられることも、多くが認めるところだろう。そこで、最近の英語教育の動向に目を向けてみると、コミュニケーション能力が重要視されており、とにかく「慣れる」ことで英語力を育成しようとする傾向にあるように感じられる。もちろん、「慣れる」ことは大切であるし、英語をツールとして使えるようにならなければ、学習する意味がないのも当然である。しかし、限られた時間の中で効率よく英語力を身に付けるためには、「慣れる」だけではなく、きちんと「理解」することも重要であることは間違いない。その「理解」を促す過程で、最新の研究成果はもちろんのこと、概論レベルの知識であっても、授業者の工夫次第で、学問的知見を活かすことは十分に可能であると考えている。本シンポジウムでは、「学問的知見を英語教育に活かす」というテーマのもと、各発表者が、各々の専門分野における英語教育に活かすことのできる学問的知見や、その知見を活かした教授法について取り上げる。

発題者 1

英語の指示表現の機能

日本女子体育大学助教 山田 七恵

中学校および高等学校で文法事項を教授する際に使用される例文は、文法事項の習得に重きが置かれているため、当然ながらそれがどのような状況で使われているのか、前後関係や談話者の知識にまで注意が払われることは殆どない。しかし、**There is a pen on the desk. The girl standing at the door is my sister. I met a boy whose father is a famous writer.** など、定／不定冠詞をはじめ指示形容詞・代名詞を含む指示表現の用法を正しく学ぶ（教える）ためには、談話内で話し手と聞き手がどのようにその対象を認知しているのか、語用論的な要因を考えることが不可欠である。本発表では、英語指示表現の用法を再確認するとともに、それが談話内でどのように認知され、どのような前提のもとで使用可能なのかに着目し、例文を検討していく。談話者が指示表現をどのような直感で使用しているのか光を当てること、英語の指示表現の機能を再考したい。

発題者 2

English as a Lingua Franca (ELF) に基づいた英語教育

明星大学助教 藤原 愛

国際理解や異文化理解が叫ばれる今日、コミュニケーションを重視した日本の英語教育において、「発音」についても ELF の視点からのさらなる研究、またそれに基づいた指導法が求められている。いわゆる「ネイティブの発音」にとどまらず、英語の発音はどうなっているか、またどうあるべきかを学生とともに考える授業を行っている。世界に広がる英語話者の現状を理解することにより、新しい英語の形を学習者に提示することで、日本人がコンプレックスを抱きやすい「発音」を、もっと楽しんで学習して欲しいと願っている。また、日本語母語話者にとってなぜ英語を習得することが難しいのかを、日本語と英語、必要であればその他の言語の発音を比較し考えていくことにより、自らの母語についての理解も深められると考えている。今回の発表では、発音を **correct**（正しい）という考え方ではなく、**intelligible**（理解できる）という側面から捉え直し、今後の英語教育への示唆を与えていきたい。

発題者 3

英語史の知見を英語教育に活かす～習熟度の別を問わない効果的な発問を探る～

日本獣医生命科学大学専任講師 鴫崎 敏彦

これまで発表者は、中学校、高等学校、専門学校、大学と、様々な教育機関で英語の授業を担当してきたが、どの教育機関の授業においても、学生（生徒）の興味・関心を引いたり、より深く理解させたりする上で、英語史の知識は非常に有用であると感じてきた。もちろん、英語史の知見を授業者が説明の中で披露するだけでも、学生（生徒）の知的好奇心を喚起するという効果は生まれるだろう。しかし、それだけでは、学生（生徒）に自分の頭を使って「考える」ということをさせることができない。そこで、発表者は、「発問」を工夫することで、学生（生徒）に「考える」きっかけを与えることが重要であると考えている。本発表では、義務教育課程を修了している英語学習者を対象とし、彼らにこれまで考えたこともなかったようなことを考えさせ、本質的な理解へと導くために、英語史の知見を活かした「発問」が習熟度の別を問わず効果的であることを、実践報告の形で提示したい。

(シンポジウム司会：和光大学非常勤講師 奥井 裕)

第 128 回例会 (2014.3.2. 日本大学芸術学部江古田校舎)

〈研究発表〉

「*The Water-Babies* における魂の成長」

茨城大学大学院 海老沢朱里

本発表は、英国 19 世紀の作家で牧師であったチャールズ・キングスリー (Charles Kingsley, 1819 – 1875) が 1863 年に出版した児童書『水の子どもたち』(*The Water-Babies*) の登場人物が遂げる「魂の成長」の在り様についての考察をとおして、キングスリーが社会に向けたメッセージを明らかにするものである。発表では、まずキングスリーとその時代の歴史思想的背景についての概説をしたうえで、キングスリーのキリスト教思想とダーウィンの進化論の関係を説明し、それがどのように作品に反映されているかについての考察を行なった。主人公トムやグライムズ親方等の主要人物が経験する事例についての考察をとおして、本発表は、キングスリーが社会に対して精神的な改善の重要性を本書をとおして訴えていたことを明らかにした。

(司会：茨城大学 小林 英美)

第 129 回例会 (2014.12.7. 於日本大学文理学部)

〈研究発表〉

「定期刊行物での予約購読形式詩集の書評 ——読者拡大の意図——」

茨城大学准教授 小林 英美

そもそも予約購読形式での出版は、「予約」というかたちで「読者」が限定される出版形態である。しかし読者が拡大される手段やチャンスはあった。その一つは定期刊行物での書評である。本論ではその具体的事例として、労働者階級女性詩人エリザベス・ハンズ (Elizabeth Hands, 1746-1815) が 1789 年に出版した詩集『アムノンの死』(*The Death of Amnon / A Poem. With an Appendix: Containing Pastorals, and Other Poetical Pieces*) の予約購読者と定期刊行物書評の関係について論じ、同時代書評の影響力の一端を指摘した。

司会 早稲田大学非常勤講師 藤原 雅子

〈連続シンポジウム〉

「学問的知見を英語教育に活かす」

発起人： 日本獣医生命科学大学専任講師 鴫崎 敏彦

発題者 4

「*Summing Up* を教室で読む」

東洋大学非常勤講師 岡部 佑人

本発表では、William Somerset Maugham の *Summing Up* を取り扱い、英語学習者が、英語で英語の書き方を理解することの重要性を指摘する。現在の英語教育の現場に目を向けると、日本語で書かれた文法テキストを解き、単一の答えが決まっているという授業が多いように思う。答えは本当に決まっているのだろうか。曖昧性を喚起することで、考えるきっかけになり、理解させることもあるのではないだろうか。このような問いを踏まえ、教室現場に一石を投じてみたい。

同書の第八章は、英語で英語の書き方を理解させるのに適した内容となっている。

Maugham が若い臨時の秘書に校正を頼んだ際の話、後半部分ではとある大学教員に校正を頼んだ時の話がそれぞれ紹介される。秘書に対しては批判的に、大学の教員に対しては好意的に捉えている。それぞれの例を具体的に示しつつ、第八章が喚起している問題点を指摘し、それを教室現場に還元するような問いかけを発することを目標とする。

発題者 5

「混乱の多い英文法の専門用語について」

北海道教育大学旭川校准教授 野村 忠央

発題者はこれまで、統語論、英語語法文法研究などの、英語学、言語学の理論的及び実証的研究に従事してきたが、その研究成果を分野内の世界だけに留めておくのではなく、一般の英語教育、英語学教育、英文法教育全体に対して還元することが必要だと、従来より強く考えていた。

本発表は、本連続シンポジウムの趣旨を踏まえ、特に、日本の英語教育（及び、英語学、英文法の分野）で氾濫・混乱している専門用語について、その氾濫・混乱の原因、そして整理・解決の方法を、歴史的（英語教育史及び英語学史的観点）、英語学・言語学的、両方の立場から探っていくことを目的とする。

具体的には、不定代名詞、不定冠詞、不定詞などのそれぞれの「不定」の意味、subjunctive moodの訳語（仮定法、接続法、叙想法）の問題、一般的には基本的な用語と考えられる目的語、補語という用語の問題などについて広く議論したい。

（シンポジウム司会：和光大学非常勤講師 奥井 裕）

関西支部第 27 回例会（2014.9.10. 於同志社大学今出川烏丸校地志高館）

ワークショップ「ゴシック小説を読む」

司会：甲南大学非常勤講師 吉田 一穂

『吸血鬼』の『起源』をめぐって

大阪市立大学非常勤講師 小林 裕史氏(ゲスト)

『ドラキュラ(1897)』のあの、刑罰、祓魔術、死体損壊あるいは陵辱の目覚ましい混淆ないし圧縮とも言うべき、ルーシー杭打ちのシーンはどこから来たのか。胸への杭打ちは、刑罰として実際に行われもしたし、叫びと痙攣は、悪魔憑きにも見られるものであった。が、もちろんそうしたシーンは、何よりも、啓蒙の始動期（1720年代～30年代）に西欧へと伝えられることになった、東欧での吸血鬼事件が最大のベースになっていることだろう。その事件では、心臓を杭で打たれた、吸血によって人々を死に至らしめたとされる死体が身の毛もよだつ叫びをあげたり、そこから大量の新鮮で真っ赤な血が流れたりもした。さらに遡れば、啓蒙の胎動期（1680年代～1710年代）における、魔女や悪魔憑き、墓の中で屍衣を食う死体から、墓より出て人の血を吸う死者（「魂から分離された身体」）への超自然的なものに対する関心の移行に、西欧での吸血鬼観念確立の過程の一端を見てとることができる。

Dracula ——ヴァン・ヘルシング教授の説明と物語の展開

甲南大学非常勤講師 吉田 一穂

『ドラキュラ』(1897)において、ヴァン・ヘルシング教授の説明は、作品を展開させる上で、効果的に働いている。ブラム・ストーカー(1847-1912)は、〈ありえないこと〉が存

在することを信じさせる手段としてヴァン・ヘルシング教授による説明を用いている。最初、作品は〈ありえないこと〉が支配的であるが、ヘルシング教授が登場し、〈ありえないこと〉を説明することにより、吸血鬼に関する真実が徐々に明らかになる。

実証と目撃という経過の後、特筆すべきことは、ヘルシング教授がドラキュラに対抗すべく、共同体のメンバーを団結に導いていることである。ストーカーは、ヘルシング教授による説明を〈ありえないこと〉を明らかにするためだけでなく、共同体のメンバーを結束させるためにも用いた、と言っているだろう。

ドラキュラのリベンジ——ある実験的な読み方

同志社女子大学非常勤講師 江藤あさじ

小説では、戦いの中で命を失ったキンシーの名がミナとジョナサンの子供に受け継がれる。それほど重要な立場にない彼の名がなぜ新たな生命を得ることになるのか。本発表では、登場人物の出身国が持つ宗教的なステレオタイプに注目した。もしプロテスタントとカトリック教徒の間に子供が生まれた場合、ローマ・カトリックの慣例として、子どももカトリック教徒にしなければならない。国教徒である二人の子供が受け継いだ名前の持ち主が、国民の大半がローマ・カトリックの信者であり、歴史的にアイルランドと苦しい時代をともにしたことがある国の出身であることは興味深い。さらに、ミナには、一度はドラキュラ（ローマ・カトリック）と交わったという消せない事実がある。この作品が執筆された当時、ジャガイモ飢饉で受けた傷がまだ癒えぬアイルランドではナショナリズムの運動が最盛期を迎えていた。ストーカーがどれほど拘っていたのかはわからない。しかし、2級ながらもアイルランドで市民権を得ていた彼が、当時の宗教解放令によって、それすらも失いかねない窮地に立たされたであろうこと、さらにはナショナリズムから最後にカトリックに改宗したオスカー・ワイルドとの交友関係があったことなどから推察すれば、彼自身も脱英国主義に影響を受けていたと十分考えられる。これらのことを総合的に考えれば、キンシーの名を最後に再生させたことの原因が見えてくる。

裏返しのゴシックネス Björk “All is Full of Love” のMVを読む

同志社大学教授 遠藤 徹

Björk の顔をもつ二体のアンドロイドが愛を交わす場面を描いたこのミュージックビデオには、きわめて現代的な意味を読み取ることができる。たとえば、それは機械による人間的なものの複製が究極にまで推し進められ、ついには人間的なものすべてが機械によって複製される可能性を示唆している。それは、一見すると恐ろしいことのようにも思えるが、逆にそこでこそ真に人間的なものが解放されるのだと読むことも可能となる。たとえば、アンドロイドの白い顔は、白人優位社会を強調しているように見えながら、逆に元の人間の個性を曖昧化することで白人の優位性そのものを解体しているのだと読むこともできる。あるいは、アメリカの軍事テクノロジーは現在、ダナ・ハラウェイが提起したようなあらゆるものの境界を破壊する脱構築的なものへと向かわず、人間的なものを機械がすべて代替し、人間は付加価値的なものとしてそこに従属するだけという状況をもたらしつつある。このような現状の進み行きを前にしたとき、このビデオが示すような人間的な愛や快樂の交感の複製へと向かうテクノロジーに、逆にこうした現状からの打開策を見出すことができるようにも思われる。

2013 年

第 5 回年次大会 (2013. 9. 1. 於日本大学芸術学部江古田校舎)

〈研究発表〉

早稲田大学非常勤講師 水野 隆之

ディケンズの中編小説『憑かれた男』(1848)は、『クリスマス・ブックス』(1843年の『クリスマス・キャロル』から始まって 1847 年を除くクリスマスの時期にディケンズが毎年発表した 5 つの中編小説)の最後の作品である。ディケンズ研究者が『憑かれた男』を取り上げる場合、主人公レドローの中にディケンズの心の闇を読み取ろうとする、いわゆる伝記的研究の観点から論じたものが多く、本格的な作品論はごくわずかしかない。確かに『憑かれた男』はディケンズの主要な作品と肩を並べるほどの傑作とは言い難い。しかし、この作品を丁寧に読んでいくと、クリスマス向けの教訓譚としてのストーリーは簡潔であっても、一つ一つの場面が非常に綿密に練られた、奥深い作品であることが分かる。本発表では、過去の記憶を消し去ったレドローが改心に至る過程とそこでミリーと名もなき浮浪児が果たす役割、描写や表現の方法などに着目しながら、『憑かれた男』が持つ豊かな物語世界を報告した。

(司会：早稲田大学非常勤講師 田村 裕二)

〈シンポジウム要旨〉

主題：英米文学と旅

甲南大学非常勤講師 吉田 一穂 (一發起人として)

旅や移動という言葉で我々が最初に想起するのは、余暇を楽しむための空間移動(観光旅行)であろう。日常生活から解放されたのんびりとした時間を思い思いの場所(非日常的空間)で過ごし心身を癒すことが、我々にとっての旅ないし、移動の目的である。また旅は好奇心を満たすという目的を持つこともある。英国の駐日公使であったアーネスト・サトウ(Ernest Satow, 1843-1929)の日本内陸旅行に関する日記を読むと、新しい発見だけでなく、自国の文化との比較という視点が見られる。旅に関する興味は古今東西変わらぬものようである。

しかし、一方で旅は苦難でもある。移動によって人々は日常言語や習慣、家族、親族関係から切り離され、伝統的な法関係の及ばない異境に身を置くことになる。このことから旅は過去との決別であり、異文化との出会いでもある。作家や作品の中の登場人物は、異文化と接触することによって自らのアイデンティティを認識したり、再確認したりする。

旅は人生の道を象徴することもある。旅によって今までと異なる人生を歩む人間もいるからである。ロビンソン・クルーソー(Robinson Crusoe)や *The Pilgrim's Progress* のクリスチャン(Christian)は、なぜ旅をしなければならなかったのか？ 作家たちは、魂の巡礼という意味を作品の中に持たせている。文学の中で旅を考えることは、異文化の意味、作家や登場人物のアイデンティティ、人生の意味を考えることにつながり、大変意義深いと言える。

このような主旨のもとシンポジウムを行うこととなった。英文学 17 世紀からは大西氏、18 世紀からは植月会長、19 世紀からは吉田が、そして米文学からは横山氏が、それぞれの観点から旅を論じた。相乗効果により、文学と旅を考える上で有意義なシンポジウムとなった。

「ミルトンとグランド・ツアー」

早稲田大学非常勤講師 大西 章夫

巡礼を口実として「旅」は4世紀頃始まったとはいえ、17世紀はヨーロッパの宗教戦争も一段落ついて、治安の安定とともに現代的意味での旅が始まった時代でもある。しかしまだ「旅」は富裕層にのみ限られた娯楽であった。王侯貴族でさえ、政務や統治に忙しく、ピョートル一世のような旅行者は例外的だった。

ちょうどこの時代にヨーロッパの辺境にある英国では、より文明の進んだフランスやイタリアを見聞する旅「グランド・ツアー」が散発的に始まる。18世紀には紳士教育の集大成として盛んになる「グランド・ツアー」を、富裕な中産階級の出であるミルトンは時代に先駆けて経験した。1638年から翌年にかけて彼はイタリアを巡り、さらにギリシアに向かう予定を切り上げて帰国するが、旅の直前の作品にも、帰国後の彼の詩作や文筆活動にも深く影響を及ぼしている。今回のシンポジウムでは、グランド・ツアーをその最初期に経験したミルトンがこの旅行経験から得た文学的資産、またその後の「論争時代」や後期三大叙事詩の執筆にあたって自身の立場補強と政治的優位のためにいかに旅行経験をフルに利用したかを、当時の大陸旅行事情などを傍証にして調査報告した。

「馬の樂園と地獄 —— 〈フウイヌム〉から「ギルピン」まで」

日本大学教授 植月恵一郎

十八世紀イギリスでは、スウィフトが馬の樂園「フウイヌム」を語る一方で、「イングランドは馬にとって地獄であった。しかし女性には樂園、男性には煉獄である」という諺が語られた時代でもあった。「フウイヌム」とは現実に酷使される馬たちの陰画世界であったろう。本シンポジウムでは、クーパーの短詩「ジョン・ギルピンの愉快な話」(1782)に登場する馬や馬車の描写を分析しながら、ホガースの諷刺画、スタップズの〈馬〉の絵なども視野に入れつつ、旅の手段とされた馬や馬車を牽く馬がいかに虐待されていたかを明らかにした。

「*Little Dorrit* —— エイミー・ドリットとグランド・ツアー」

甲南大学非常勤講師 吉田 一穂

Little Dorrit (1857)は、チャールズ・ディケンズ(Charles Dickens, 1812-70)の11番目の小説で、ブラッドベリー・アンド・エヴァンズ(Bradbury & Evans)社によってハブロット・K・ブラウン(Hablot K. Browne, 1815-82)の挿し絵つきで、1855年12月から1857年6月まで月刊で発表された。

1855年から1856年にかけてディケンズはイギリスとフランスを行き来した。どこに行っても「高名な作家」として挨拶され、そのことは彼を非常に喜ばせた。華やかで洗練されたパリと比べると、今やロンドンには憂鬱で薄暗い場所であった。このようなパリと比較すると、ヴィクトリア朝時代のイギリスはディケンズにとって監禁状態との関連で連想される場所であった。ディケンズは、*Little Dorrit*においてエイミー・ドリット(Amy Dorrit)のグランド・ツアーを通して監禁状態から解放されても心理的に平穏を得られない彼女を描き出している。

本発表では、*Little Dorrit*におけるグランド・ツアーとグランド・ツアーがエイミーにとって何を意味するかについて考察してみた。

「ラフカディオ・ハーンの「古い日本」発見の旅——「ある保守主義者」とは誰か」

群馬工業高等専門学校准教授 横山 孝一

『心』（1896年）に収められた「ある保守主義者」は平川祐弘東京大学名誉教授によって、世間から忘れ去られた一日本人、雨森信成をモデルにしていることが明らかになっている。原稿は残っていないが、どうやら雨森が英語で綴った自伝をもとにハーンが作品化したらしい。しかし、わが国の怪談を再話して自己を語ったハーンのことである。雨森の名前が本文中にまったく出てこないこの作品を単純に雨森信成の評伝と見なすわけにはいかない。じつを言えば、『心』は、ハーンがわが国に帰化して正式に小泉八雲になったひと月後（1896年3月）に出版され、長男の一雄がこの本から、ハーンは日本人として書いたと指摘しているのである。「ある保守主義者」には、「日本人」八雲の姿も垣間見えるのだ。

本発表では「ある保守主義者」を、雑誌記者として来日当初に書いた旅行記「日本への冬の旅」と比較し、外国人旅行者から日本人保守主義者へと変わる、富士山をめぐる視点と意味の劇的变化に着目した。これによって、欧米の暗部を見て祖先崇拜など古い日本の価値観に開眼する名無しの主人公の中から、放浪の末に理想の地を発見して日本人になった作者ハーンの意識をあぶり出してみた。

（シンポジウム司会：日本大学教授 植月 恵一郎）

第126回例会（2013.3.3. 日本大学芸術学部江古田校舎）

〈ミニ・シンポジウム〉

主題：「拡大する読者と英米文学」

本学会2010年度全国大会（於日本大学）におけるシンポジウム「拡大する読者ネットワーク：文学嗜好の共有が作り出す19世紀文芸思潮」（発題者兼司会：小林、発題者：中垣、藤原）の続編としての位置づけにあるシンポジウムである。今回も小林が引き続き司会をし、最初に19世紀の出版・読者層などの事情を概観したうえで、女性詩人シャーロット・スミスの予約購読出版の事例をとりあげた。続いて水野氏が、人気作家ディケンズを取り上げ、前回の中垣氏のマーク・トウェインと対照するかたちとなった。（当日は中垣氏も出席していたので、刺激的な質疑応答となった）また外部からの発題者として、今回は金澤氏が参加し、アメリカ女性詩人エミリー・ディキンソンの事例を取り上げ、女性詩人という立場で小林の発題と対照されただけでなく、前回の藤原氏のキーツと対照でき、こちらも有意義な質疑応答となった。

（司会：茨城大学 小林 英美）

発題者1：茨城大学准教授 小林英美

「支援者を通して拡大・増加する読者——シャーロット・スミスの詩集の事例」

茨城大学 小林 英美

英国女性詩人シャーロット・スミス（Charlotte Smith, 1749–1806）が予約購読形式で出版した *Elegiac Sonnets and Other Poems* 第5版(1789)の出版経緯とその予約購読者についての具体的な分析、さらには定期刊行物での書評についての考察を通して、予約購読形式詩集における読者の拡大の事例を究明した。経済的に苦しい境遇の詩人が頼る事例が目立つ予約購読形式であるが、現代と同様に、購入者が限定される豪華版の出版にも利用

された形式であった。この第5版は、初版（1784）に挿絵を5枚加えて増補加筆したいわば豪華版で、半ギニーの高価な詩集であった。それゆえ予約購読者は富裕層に限られ、首相ピットのような政治家や著名な文化人が名を連ねることになった。社交界の話題の背後にある読書情報網が見いだせよう。それはまた定期刊行物書評から跡付けることができた。

発題者2

19世紀における小説読者の拡大とディケンズ

早稲田大学非常勤講師 水野 隆之

19世紀は小説の時代と呼ばれ、小説という新たな文学ジャンルが確立し、それとともに読者層が飛躍的に拡大した時代であった。そしてこの著しい変化の時代を牽引した作家がディケンズである。本発表では、まず19世紀における読者層の拡大をもたらした社会的、経済的、文化的要因を簡単に指摘したうえで、ディケンズが増大する読者とどう関わろうとしたのかを考察した。

ディケンズの多くの作品は月刊分冊や週刊誌連載の形で発表されたが、この発表形式は読者の反応を確かめながら執筆することを可能にするとともに、定期的に読者と交わる感覚をディケンズに持たせてくれた。また、晩年ディケンズは自作の公開朗読を行ったが、その目的は読者と友情を育むことであった。ディケンズの作家としての、また朗読者としての活動を見ていくと、急激に増大する読者とどんな形であれ交流を保とうとした作家の姿が浮かび上がってくるのである。

発題者3

「エミリ・ディキンソンと「読者」——「送られた」詩と「送られなかった」詩」

早稲田大学非常勤講師 金澤 淳子

エミリ・ディキンソンには友人や親戚たちに送った詩群と、別にもうひとつ、誰にも送ることなく手元に置いていた詩群とがある。彼女が最も集中的に詩作した1860年代前半はアメリカ南北戦争の時期であり、友人や親戚を介して北軍系新聞 *Drum Beat* にその詩が掲載され、匿名ながらも六千部の読者ネットワークに広がったことになる。掲載された詩そのものは戦争とは関わりなく見えるが、戦争関係の紙面で詩の印象も一変する。一方で、奇妙なことに、ディキンソンが南北戦争に影響を受けて書いたとされる詩のほとんどは、誰かに送られたという確固たる証拠がない。心の闇を扱った詩群は、同時代の読者にではなく、未来の読者に託すようなかたちでひっそりと置かれていたのではないか。

(ミニ・シンポジウム司会：茨城大学准教授 小林 英美)

第127回例会 (2012.12.1. 於日本大学文理学部)

「物語作家としての Harriet Martineau と観念連合説」

桜美林大学准教授 大竹麻衣子

Harriet Martineau (1802-76) は、ヴィクトリア朝を代表する論客、社会改良家として知られているものの、その膨大な著作の中に、多くのフィクション作品が含まれていることはあまり知られておらず、また、その文学的貢献についてはほとんど論じられることがない。本発表の目的は、マーティノウが物語作家あるいは小説家として目指した方向性を検

証し、それがヴィクトリア朝初期における小説の発展と密接に関わっていたことを示すことである。1840年代の終わりごろから、ヴィクトリア朝小説にみられる主要な特徴、すなわち、中流階級の家庭を舞台とする人間模様を背景に、人物の内面生活を詳細に描くという特徴が顕在化してきた。本発表では、このような流れにつながる先駆的な要素が、1830年代に発表されたマーティノウの物語作品にみられることを、心の構造や働きに関する当時の主要な理論の一つであり、マーティノウが深い関心を寄せていたことが知られている観念連合説との関係から明らかにする。

(司会：群馬パース大学保健科学部准教授 杉田雅子)

「予約購読出版詩集と定期刊行物書評——グラント夫人の場合」

茨城大学准教授 小林 英美

スコットランド女性詩人アン・グラント (Anne Macvicar Grant, 1755–1838) の『様々な主題による詩集 (*Poems on Various Subjects*)』(1803)の同時代における受容の実情を、予約購読出版の経緯とその購読者層の分析と、その定期刊行物での書評の分析を通して探るものである。教区牧師の夫と死別したことによる経済的危機から、彼女は詩集を出版することになったが、ゴードン公爵夫人 (Duchess of Gordon) やフリーメーソン等の有力な支援者がついたことによって、2246件もの購読者を得て出版は大成功した。その背後には、作品のハイランド的性格を前面に出す編纂をしたジョージ・トムソン (George Thomson, 1757-1851) の尽力も特筆すべきである。彼はスコットランド民謡集の編纂にも多大な貢献をしている。二つの書評も良好であり、この詩集を契機に、彼女は作家として、また民謡のソングライターとして生きていく。

(司会：早稲田大学非常勤講師 藤原 雅子)

関西支部第26回例会(2013.9.14. 於同志社大学今出川烏丸校地志高館)

ワークショップ「都市と表象」

司会：甲南大学非常勤講師 吉田 一穂

『二都物語』——パリとその表象」

甲南大学非常勤講師 吉田 一穂

『二都物語』(1859)は、ディケンズが1859年4月に『オール・ザ・イア・アラウンド』を創刊するに当たって連載を始めた歴史小説であり、リチャード・ウォーダーの役を演じて以来、彼の心を去らなかつた熱い情熱の全てを、フランス革命の恐怖を背景に力強く表現したものだ。

『二都物語』は、二つの都市の物語、すなわち、パリとロンドンの物語である。シルベル・モノは、『二都物語』は二つの都市を密接に結びつけているとは言いがたい」と述べているが、パリとロンドンはそのそれぞれの社会情勢の中で生きる群衆や個人を考える場合、類似点、相違点、対比などの観点から密接に結びついていないとは言い切れない。ただ、ディケンズがフランス革命を中心に物語を描いているせいか、パリを中心に物語が展開していく印象を読者は持つ。本発表では、パリを中心に物語を考察し、パリが表しているものについて述べてみた。

「都市」というテーマにもとづき、ハズリットの二つのエッセイを中心に、そのユニークなロンドン観を考察した。19世紀のその後の作家たちのネガティブなロンドン観とは対照的に、ハズリットは極めてポジティブなロンドン観を提示している。それと対応するかのように、ハズリットは田舎、とくに田舎の人々に対する厳しい文章を残している。人が少なく、他者との交流や娯楽が少ない田舎では人間がだめになるとして、その反対に人があふれ、社交や娯楽のある都市ロンドンを高く評価する。

さらにハズリットによると、ロンドンでは、田舎とは異なり、人が「抽象的に」存在できる。人はそこでは具体的な個々の利害や個人的な依存関係からも自由でありうる。また、個人の身分や金持ちか否かといったことも度外視され、その人そのものの価値によって評価されるという対等の付き合いが可能になるという。その点でも田舎の人々と異なっている。

ハズリットがロンドンをこのように考える背景について、本人は述べていないが、19世紀の初め多くの人がロンドンに流れ込んでいて、素性のわからない大量の人と接触する必要が出てきたことや、他の雑誌からコクニーとして攻撃されたことに対してロンドン人としての自負があった可能性が考えられる。

『『華麗なるギャツビー』におけるジャズエイジの特色』

『華麗なるギャツビー』は1925年に出版されたFitzgeraldの最高傑作とされている。第一次世界大戦後、アメリカ社会は繁栄の最高潮に達し、その時代を作家自からJazz Ageと命名し、その時代の特色を鮮やかに作品の中で描いている。1919年5月に始まり1929年10月のウォール街の株の大暴落で幕を閉じた、短くも華やかな時代であった。Jazz Ageの特色は、特にニューヨークに見られた。車、ジャズ、フラッパー、大量消費、経済発展による貧富の落差など、社会的、風俗的に著しい変化をとげた時代である。この作品は、中西部のモラル感を持つナレーターの視点で語られることにより、ニューヨークを中心とした東の社会におけるJazz Ageの特色が鮮明に読み取れる。特に、主人公Gatsbyの開くパーティーにその特色が顕著に表わされている。Jazz Ageは10年という短い時代であったが、1920年代のアメリカに見られる一社会現象として捉えられる。

2012年

第4回年次大会 (2012.9.2. 於日本大学芸術学部江古田校舎)

〈研究発表〉

「A Passage to India」に見る E. M. Forster のパターンとリズム」

Edward Morgan Forster (1879-1970)は、1927年に出版した*Aspects of the Novel*の中で小説について七つの面に着目し論証している。中でも、小説の持つリズムに関する考

察は、Forster の目指した小説の理想形を示したものといえる。彼が理想とした小説のあり方とは、交響曲が聞き手の心理を解放へと向かわせるように、小説も音楽のように完成ではなく解放へと向かえないのか、というものである。本発表では生前出版された五つの長編小説のうち、彼にとって最後の長編小説である *A Passage to India* (1924) を検証の中心に据えた。そして彼の各作品にみられるパターンとリズムの特色に着目しながら、*A Passage to India* の構成及び展開の仕方が、Forster にとって小説の理想形である「解放」へと向かう軌跡を検証した。

(司会：松山大学准教授 新井 英夫)

「英語聖書における外国語の影響」

日本大学准教授 佐藤 勝

発表者の長期的な研究は、英語聖書四福音書を言語資料とする英語準動詞・節の通時的な研究である。「英語聖書における外国語の影響」を考慮しながら研究を続けている。しかし、確たる理由もなく「英語聖書は外国語の影響を(強く)受けており、言語資料として適当ではない」と英語聖書利用を否定する人が今でもおり、誠に遺憾である。これを受け、本発表では次の2点を研究目的とし、それらを発表する。①英語聖書に関する先行研究を紹介し、そこから導き出される結果を示す。②英語聖書が外国語の影響を(強く)受けているとは必ずしも言えない、ことを証明する。本証明は、聖書の特長を活かした統語的立場からの独創的な証明である。

本研究が意義深いことは、「英語聖書における外国語の影響」に関する誤認者の存在、そして上記研究目的よりご理解いただけよう。

本発表の構成を、1「序」、2「英語聖書について」、3「一証明」、4「結び」とする。

(司会：北海道教育大学旭川校准教授 野村 忠央)

〈シンポジウム要旨〉

主題：ディケンズ生誕 200 年を迎えて

2012 年はチャールズ・ディケンズの生誕 200 年という記念すべき年である。本国イギリスでは、ディケンズの誕生日である 2 月 7 日に彼が眠るウェストminster 寺院で式典が催され、チャールズ皇太子も参列し、イギリスが生んだ大作家の生誕 200 年を盛大に祝ったようである。これに便乗するわけではないが、当学会にはディケンズと同時代の作家や文化を研究する会員を比較的多く有していることもあり、ディケンズについて本大会で取り上げるのも無意味ではなかろうと考え、ここに「ディケンズ生誕 200 年を迎えて」と題してシンポジウムを企画した。ディケンズを専門とする立場から吉田氏と水野が、またユニークなディケンズ論を発表したジョージ・オーウェルを研究する近藤氏がそれぞれ以下のテーマで発表する。ディケンズの魅力と彼の作品を理解する一助となればと願う。

(司会：早稲田大学非常勤講師 水野 隆之)

「ディケンズとジェンダー ——家父長制神話の崩壊とディケンズの境界線——」

甲南大学非常勤講師 吉田 一穂

チャールズ・ディケンズ(Charles Dickens, 1812-70)の作品をジェンダーの観点から考えると、気づかざるを得ないことがある。それは、ディケンズが家父長制神話の崩壊を

描きながらも、男女同権を主張するような女性を描ききれていないことである。

家父長制神話の崩壊は、*Little Dorrit* (1857)において非常にはっきりと見られるが、この作品だけでなく、すでに *Dombey and Son* (1848) と *Hard Times* (1854) にも見られる。その崩壊の過程においてある共通の要素が見られる。それは、ディケンズが父親と娘の関係において、人間の自然な状態の重要性を訴えているということだ。当然その人間の自然な状態の重要性の中には女性の自然な状態の重要性も含まれていることから、フェミニズムの先駆け的意味合いもあるわけだが、ディケンズは多くの女性たちをある境界線の内部で描き出している。その境界線が色濃く現れているのが、*Bleak House* (1853) である。

本発表では、*Dombey and Son* と *Hard Times* における家父長制神話の崩壊を考慮した後、*Bleak House* でどのような境界線が見られるかを考察した。

「オーウェルの見たディケンズ」

中央大学非常勤講師 近藤 直樹

ディケンズはジョージ・オーウェル(1903-50)が敬愛した文学者の一人で、本格的な作家論である「チャールズ・ディケンズ」(1940)は、彼の代表的エッセイの一つである。彼は少年時代からディケンズを読み、1933年にはG・K・チェスタトンの『チャールズ・ディケンズ論』(1906)の書評を、1944年にはディケンズの『マーティン・チャズルウィット』(1843)の書評を発表するなど、ディケンズに生涯、関心を持ち続けた。本発表では、まず、オーウェルがディケンズのどのような点を評価していたのかを、「チャールズ・ディケンズ」を通じて確認する。次に、それを踏まえたうえで、オーウェルの著作に窺えるディケンズの影響を、思想と創作技法の両面から考察する。オーウェルとディケンズの影響関係については、これまでも多くの評者が論じているが、概して部分的・概説的な指摘が多いため、具体的な比較を交えた体系的な議論の余地は残されていると思われる。本発表が、その余地を埋める一助となれば幸いである。

「近年のディケンズの伝記的研究の成果について」

早稲田大学非常勤講師 水野 隆之

ディケンズ生誕 200 年に合わせてか、ここ数年の間にディケンズの伝記および伝記的研究をテーマにした著作が次々と出版されている。これはディケンズ研究者たちがディケンズの作品だけでなく、彼の歩んだ生涯にも深い関心を示していることの証左と言えよう。これらの研究の中には、新資料を提示してこれまで広く受け入れられてきた定説に疑問を呈する興味深い考察を含んだものがある。一方で、決定的な証拠がないために未だ見解の一致が見られない点もある。本発表では、そのような例をいくつか紹介しながらこれまでの伝記と近刊の伝記との差異を指摘するとともに、今後の伝記的研究の展望についても触れてみたい。

第 124 回例会 (2012.3.13. 於日本大学会館第二別館)

「『ラプソディー』とロバート・バートンの『憂鬱の解剖』」

青山学院大学非常勤講師 妹尾新太郎

「奇書」と呼び習わされて来たためもあるろうか、ロバート・バートンの『憂鬱の解剖』は、その知名度に反して殆ど読まれることがない。確かに、この作品の一大特色を成す

‘rhapsody’ (寄せ集め) という形態からして、特にポストモダニズムの目から見れば、凡そ非文学的な表現形式のように思われるかも知れない。しかし、往古以来、連綿として受け継がれて来た西洋の就中「諷刺」の伝統からすれば、この形式が寧ろ正統中の正統であることは、‘satire’ (諷刺) という言葉の語源が古代ギリシャ語の ‘satura’ (細切れ・寄せ集め) にあるという一事に徴しても明らかであろう。本発表では、その辺りに話の端を発しつつ、僭越ながら、バートンとその主著の大雑把な紹介をさせて頂いた。

(司会：早稲田大学非常勤講師 田村 裕二)

「佐藤春夫とホイッスラー」

日本大学研究員 山中 千春

佐藤春夫「美しき町」(1919年8、9、12月)では、ウィリアム・モリス、司馬江漢、ホイッスラーなど、さまざまな芸術家の実名が挿入されている。モリスについては、これまでも先行研究でしばしば論じられてきた。また、発表者はいくつかの拙論の中で司馬江漢について考察した。ホイッスラーに関しては、作品との具体的な影響関係が見られないため、看過されてきた。しかし、作品を細かく読み込んで行くと、「美しき町」がホイッスラーの作品や芸術観との深い交響性の中から描かれていることが見えてくる。そこで、本発表では、「美しき町」とホイッスラーとの関係を分析することで、「美しき町」の孕む大正8年当時の時代状況に対する春夫の批判的姿勢を読みとった。

(司会：デジタルハリウッド大学教授 大石健太郎)

第125回例会 (2012.12.2. 於日本大学文理学部)

茨城大学大学院 山田 真

本発表は、英国の伝承童謡がフィリパ・ピアス(Philippa Pearce, 1920-2006)の児童文学作品『トムは真夜中の庭で』(*Tom's Midnight Garden*, 1958)に与えた影響を明らかにし、新たな読みの可能性について考察することを目的とする。

伝承童謡は、英国の文化や国民性を映し出し、児童文学にも様々な影響を及ぼしている。『トムは真夜中の庭で』も例外ではなく、間接的に影響を与えていると考えられる伝承童謡を探る。同時に、19世紀画家ケイト・グリーンナウェイ(Kate Greenaway, 1845-1915)の挿絵が、ピアスの創作に影響を及ぼした可能性についても論じたい。

(司会：茨城大学准教授 小林 英美)

読みかえの物語としての『遠い山なみの光』——エツコの自己物語によるケア——

松山大学准教授 新井 英夫

本発表の目的は、カズオ・イシグロの『遠い山なみの光』における語り的手法に着目し、過去を語ることを避けていたエツコが、どうしてその過去を語り始めなければならなかったのか、その理由と目的を自己物語論の立場から解明することにある。

日本での戦争体験とそれによる両親と恋人の喪失、さらに渡英後の家族の離散とケイコの自殺は、エツコにとって全て目を背けたくなる事実である。エツコは辛い過去との関係を絶つために日本を離れ、英国に渡ったが、結局孤独の身となり、未だに心的外傷後ストレス障害を抱え苦しんでいる。ニキがロンドンに戻った後、エツコは再び一人となり、「自分はいったい何者なのだろうか」というアイデンティティ・クライシスに直面したのであ

ろう。妻として夫と過ごし、育児に追われ忙しい日々を過ごし、自らの過去を振り返ることから逃げ続けてきたエツコは、独り身となり忙しさから解放された現在、自己を取り戻すために、過去を振り返り、自己を確認せざるを得ない状況に置かれているのである。彼女が自己を保つ唯一の方法は、自分の過去を正当化することである。心的外傷後ストレス障害を抱える原因となった辛い過去を読みかえ、良き方向に修正することが、精神的安定のために、そして何よりも生きるために必要だったのである。このような読みかえの作業を通じて、エツコは苦痛の多い自己から苦痛の少ない自己へと変化させることができるのである。

(司会：日本大学准教授 関田 朋子)

関西支部第 25 回例会 (2012.9.11. 於同志社同窓会館)

テーマ：「ジェンダーの諸相」

第一部 基調講演

マルグレーター世

大阪大学非常勤講師 牧野 正憲

デンマーク女王マルグレーター世(在位 1375-1412)が彼女の後継者であるエーリク王にあてた、直筆の極めて私的な様々な助言の書、いわゆる『エーリクへの指示書』を通して、謎の多い彼女の政治手腕や人物像を考察した。

第二部 ワークショップ「文学とジェンダー」

司会：甲南大学非常勤講師 吉田一穂

17 世紀の新しい女性像「才女」とフェミニズムについて

関西大学非常勤講師 栗野 広雅

17 世紀の中頃、パリに「才女」(précieuse)と呼ばれる女性たちが出現した。「才女」は、たちまち当時の人々の注目を集め、小説や演劇など文学作品の格好の題材となる。ただ、作品に登場する「才女」は、賞賛されるよりはむしろ、諷刺的に描かれることが多く、フランス文学史の中でも決して重要な位置を占める存在ではなかった。

しかし、フランスの 17 世紀の女性たちの置かれた社会状況を考察する時、「才女」が登場する作品を当時の人々が残した記録として読み直すならば、作品の中に現われる彼女たちの言動は、女性史の視点から新たな意味を持つようになると考えられる。

発表では、17 世紀に出現した新しい女性像であり、フェミニズムの先駆者ともいわれる「才女」に注目し、ピュール神父、モリエール、プーラン・ド・ラ・パール作品を通して、当時の女性たちを取り巻く状況を概観した。

フェミニズム批評の功罪——翻弄される作家たち——

同志社女子大学非常勤講師 江藤あさじ

フェミニズムによる作品の批評は、それまでの作家たちの見方を 180 度転換させたり、また思いもよらない作家像を見出したり作り上げたりしてきた。中には、フェミニズムの視点から作品を通して作者の人格を糾弾し、作品そのものが持つ美しさを無視する残念な読み方も生まれた。ミルトンの作品に関するフェミニズム的な視点からの批評の歴史は古

く、有名なところでは18世紀のメアリ・ウルストンクラフトまで遡る。彼女はミルトンの女性蔑視的な部分とその正反対の部分とを正確に読み分け、その女性蔑視の部分とを非難した。娘のメアリ・シェリーは母親とは違いかなり好意的に『失樂園』に親しむことになるのだが、これもある意味母親の影響と言える。彼女はミルトンのセイタンをかなり意識したうえでかの有名は小説を書き上げる。ウルフやシャーロット・ブロンテが後世に残した小説の背後にも、ミルトンからの影響があることはよく指摘されている。ジョージ・エリオットも然りである。フェミニズム批評という分野が生まれたのは20世紀にはいつてからのことだが、このように20世紀よりも以前から同様の批評は存在しており、それによって数々の後世にのこる文学作品が生まれたことは、フェミニズム批評の「功」の部分と言える。

シャーロット・ブロンテとジェンダー——*Jane Eyre*におけるヒロインの願望と選択——

甲南大学非常勤講師 吉田 一穂

Jane Eyre (1847)は、リー・ハント(Leigh Hunt, 1784-1859)やサッカレー(William Makepeace Thackeray, 1811-63)に認められ、ベストセラーになった作品である。一方で、この作品は女性文学の古典として考えられている。それはヒロインが自身の願望によって人生の様々な局面で選択をし、自身の願望を実現するからである。

シャーロットが作品において一貫して主張していることは、女性は抑圧的な環境を去るべきである、ということである。作品の中ジェインは、安定を求めるならば、他者に選択を委ねることができるにもかかわらず、それをしない。全て自身の願望に基づいて選択をするがゆえに、彼女は自身が望む人生を得ることができると言えるのだ。発表では、主に2つの過程、すなわち、「冷遇から独立へ」という過程と「セント・ジョン・リヴァーズとの出会いと別れ」という過程を通して、作品におけるヒロインの願望と選択の相関関係と選択の意味について述べてみた。

2011年

第3回年次大会 (2011.9.4. 於日本大学芸術学部江古田校舎)

〈研究発表〉

「対立する価値観の考察——エミリ・ブロンテの思想——」

日本大学非常勤講師 山本由布子

エミリ・ブロンテの後期に書かれた詩に「私を慰める者」(“My comforter”)と題された詩がある。この詩の話者である「私」(“I”)は、「天上の日差し」(“Heaven’s glorious sun”)と「地獄の業火」(“the glare of Hell”)の間に立ち、「天使の歌声」(“seraph’s song”)と「悪鬼の呻き」(“demon’s moan”)の「混じり合った調べ」(“a mingled tone”)を呑む、とうたう。この詩から、天国と地獄、また、歓喜と苦悩という、対立した価値観を読み取ることが可能だが、その両者が「私」の中で調和するような描写を、どのように説明することができるだろうか。本発表では、ブロンテの詩、エッセイ、小説を概観しながら、天国と地獄、また歓喜と苦悩が、空間的、また時間的な尺度でどう描かれるのかを分析し、ブロンテの「対立する価値観」について考察する。

(司会 早稲田大学非常勤講師 藤原 雅子)

「民主主義的世相への徹底批判——カーライル最後の社会批評を読む」

早稲田大学准教授 岡田俊之輔

1867年、英国では第二次選挙法改正が行われ、選挙権が一層拡大される事になったが、同年8月、Thomas Carlyleは*Macmillan's Magazine*に‘Shooting Niagara: and After?’と題する一文を寄せ、翌月には加筆修正の上、小冊子として刊行した。「ナイアガラの瀧を下る」とは「大きな危険を冒す」の意。普通選挙の投票によって総てを決する民主主義の普及と、その後に続くであらう破局を憂へる、カーライル最後の社会批評である。その内容を要約すれば、自由・平等・博愛といった時代思潮に対する徹底批判と言へよう。無論、その反動性には同時代人たちからの反撥も強く、米国のWalt Whitman, *Democratic Vistas*はその一例であるが、殆ど無自覚なまま民主主義に浸つてゐる吾々現代人こそ、徒らに反撥するのではなく自己反省の糧として、カーライルの「反動的言辭」に耳を傾けなければならない。

(司会 早稲田大学非常勤講師 水野 隆之)

〈シンポジウム要旨〉

主題：教室で生かす英語学

司会 北海道教育大学旭川校准教授 野村 忠央

英語学(応用言語学と英語教育学を除く)・英文学を専攻する人たちの間で研究活動と教育活動の乖離が進んでいる。つまり、専門科目でも受け持たない限り、研究活動と教育活動(英語の授業)が別物になっているわけだが、極めて憂慮すべきことである。自分の専門を教室で生かすことができなければ、早晚、教員としての存在意義が問われ、ひいては教育現場から淘汰されることにもなりかねない。しかし、英語学・英文学は今日の英語教育の場では無用の長物になったのかと言うと、断じてそうではない。むしろ「今」のような時代だからこそ求められている。それ故に私たちは英語学・英文学の有用性をこれまで以上に外に向けて発信し、教室で生かしていく必要がある。今回のシンポジウムでは、〈教室で生かす英語学〉というテーマのもと、出現頻度が高いにもかかわらず、一般向けの英文法参考書(『総合英語 Forest』など)で詳しく扱われない二つの重要項目を研究発表の形で取り上げ、併せて仮定法についての授業報告を行う。

「結果構文における一考察——Time-away 構文および Way 構文との関係性をめぐって——」

津田塾大学助教 阿部 明子

本発表の目的は、英語の結果構文、Time-away 構文および Way 構文の言語事実を観察し、構文相互の関係がどのようになっているのかを明らかにすることである。これまで、英語の移動表現を結果構文に含めて論じる研究が多くみられるが(Levin and Rappaport Hovav 1999, Boas 2003, Goldberg and Jackendoff 2004, 米山 2007 など)、なかでもGoldberg and Jackendoff (2004)はGoldberg (1995)やJackendoff (1990)の研究成果を踏まえつつ、構文文法と生成文法を融合する方向で移動表現を結果構文に組み込む議論を行っている。本発表では、そのような考え方の妥当性を検証し、Time-away 構文と Way 構文が結果構文であると考えた場合の構文間の位置づけに関して考察する。同時に、生じ

うる問題についても議論したい。

英語における「場所句倒置構文」の特性と分析

文教大学非常勤講師 山田 七恵

In the corner was a lamp.のような、場所を表わす前置詞句が文頭に現れ後続する主語と動詞に倒置が起こる場所句倒置構文(Locative Inversion Construction; LIC)についてはその統語的特性・談話機能などを含めこれまで多くの分析がなされてきた。本発表では、英語教育ではあまり多く取り上げられないこの構文の統語的・談話的特性を改めて概観することで、実際に教える際に留意すべき点・学生が疑問に思う点を示唆し、それに回答することを試みる。同時に、場所句倒置構文に現れることができる動詞についての主たる研究を取り上げ、それらの動詞の解釈の仕方についても言及する。

「英語を苦手とする学生に仮定法を理解させるための一方法」

日本大学非常勤講師 奥井 裕

「法」とは何か?」ということを解説し、直説法現在と直説法過去を再確認させた上で仮定法過去を導入すると、いわゆる中堅以下の大学の学生でも、さほど混乱することなくこれを理解する。そして仮定法過去が理解できれば仮定法過去完了の理解も容易であり、仮定法現在の理解にも繋がる。さらに仮定法現在と命令法の間にあるいくつかの類似点を認識させることも可能である。本発表では、英語を苦手とする学生に(少なくとも当初は文法用語を極力排して)仮定法を理解させるための方法を授業報告の形で提示したい。

第 122 回例会 (2011.3.13. 於日本大学会館第二別館、以下同じ)

東日本大震災発生のため中止。

第 123 回例会 (2011.12.4.)

「18 世紀末英国の予約購読形式出版詩集とその書評：ハンズの事例研究」

茨城大学准教授 小林 英美

本発表では、18 世紀末英国の予約購読形式で出版された詩集の、定期刊行物での書評を精査することによって、それが出版と文学に及ぼす影響力について考察した。今回は特に女性詩人エリザベス・ハンズ(Elizabeth Hands)の事例をとりあげた。彼女の作品の出版は大成功であったが、その原因は有力な後援者の人脈と助力によるものであったことが、予約購読者一覧の分析から明らかになった。そして 4 つの書評の内容と書評者についての考察から、作家を擁護しようと工夫する後援者と書評者との間の暗闘が見いだせた。

(司会 早稲田大学非常勤講師 藤原 雅子)

「クリスティナ・ロセッティの詩にみるサフォー的なもの」

高崎経済大学非常勤講師 藤田 晃代

ヴィクトリア朝を代表する詩人クリスティナ・ロセッティ(Christina Rossetti, 1830-94)

の初期の詩には、古代ギリシャの詩人サフォー(Sappho, c. 600 B.C)をうたったものがある。従来の文学作品に描かれるサフォー像は、悲恋の果てに劇的な最期を遂げた詩人というロマンティック・イメージが中心になりがちだったが、本発表ではクリスティナがその詩作において愛と死の両義性、記憶の呼び起こしというサフォーの抒情詩の主題を着実にとらえていること、また語りの構造においても語り手サフォーの心情をより詳細に表現することで、苦悩しつつ生き続けるあらたなサフォー像を描いている点を論じた。また、サフォーが残した「報われない恋」の主題もクリスティナの他の詩に確実に取り入れられている点を指摘し、クリスティナの一連の創作行為では詩のテーマと構成を考える上でもサフォーの詩作との関連は重要であると述べた。

(司会 日本女子体育大学准教授 加賀 岳彦)

2010年

第2回年次大会 (2010.12.12. 於日本大学会館第二別館)

〈研究発表〉

「女性参政権運動に勝利をもたらしたのは誰か——『一世紀の闘争：アメリカ合衆国の女性の権利運動』における女性の力」

群馬パース大学専任講師 杉田 雅子

現代に生きている私たちは、女性参政権というものは、一旦与えられてしまうと、あたかも当然の権利のように思いがちであるが、実は長い闘いの末に得られた権利であることを詳細かつ客観的に分析検証したのが、1959年に発行されたエレノア・フレクスナーの『一世紀の闘争：アメリカ合衆国の女性の権利運動』である。この著書の中でフレクスナーは、19世紀初頭から1920年の女性参政権獲得までの道のりを約一世紀間の苦闘の歴史ととらえて、参政権獲得のために様々な力が働いたことを示した。本発表では、まず、彼女の分析検証した獲得に働いた力とはなにかを考えてみた。その上で、現代においてはこの運動の後半は「第一波フェミニズム運動」と呼ばれているが、フレクスナーはいわゆる「フェミニズム」という言葉を使わずに参政権運動を検証していること、フレクスナーがこの著書のためにリサーチをした1940年代、執筆した50年代は「第二波フェミニズム」が起こる前の、いわば「フェミニズム」の活動が目立たない時期であったこと、そしてフレクスナー自身は女性の権利運動に関わっていたこと、などを踏まえて、フレクスナーの女性参政権運動に対する考え方を考察した。

(司会 桜美林大学准教授 大竹麻衣子)

〈講演〉

『1984年』から『1Q84』へ——ジョージ・オーウェルと村上春樹」

デジタルハリウッド大学教授 大石健太郎

二十世紀の中葉、第二次世界大戦の直後、ジョージ・オーウェルの発表した未来小説『1984年』は世界の文学界を大いに騒がせた。そしてそれからまた半世紀、「ノーベル文学賞」候補にノミネートされる日本の作家、村上春樹が小説『1Q84』を書いた。この二作

とも洛陽の紙価を高からしめたという点において、相似点を持っているが、その狙い、内容はまったく対照的と言える。

この二つの作品をそれぞれ分解、検討しながら、両者の著作意図を繙いてみたい。「ソ連全体主義」のスターリン世界をターゲットとした『1984年』、そして現代の社会構造、思潮を俎に載せた『1Q84』、この二作をここで比較対照しながら考え直してみるのも決して無駄ではないように思える。

〈シンポジウム要旨〉

主題：拡大する読者ネットワーク：文学嗜好の共有が作り出す 19 世紀文芸思潮

茨城大学准教授 小林 英美

18 世紀から 19 世紀にかけては、啓蒙主義思想などの影響のもとで、読書趣味が拡大した時代である——社会階級的には中流・下層階級読者が増加し、女性の読者も急増し、次の時代の作家・詩人、文芸思潮を生み出す基盤を形成したのであった。またその読者の拡大と文芸思潮形成の動きは、欧米全体を包摂するダイナミックなものであった。

今回のシンポジウムは、その文芸思潮の形成過程を以下の順序で考察していくものである。最初に藤原氏が 19 世紀初頭英国の文芸嗜好と出版社の関係をとりあげ、次いで、学外からのゲストである中垣氏が 19 世紀後半のアメリカ合衆国の予約購読出版や著作権問題を扱い、最後に小林が、藤原氏と中垣氏の発題を受け止めるようなかたちで、本シンポジウムのテーマの“起点”となる 18 世紀末へ時代を遡行し、当時の英国の予約購読出版と読者層の人脈の拡大・文芸嗜好をとりあげることになる。それぞれの発題の詳細は以下のとおりである。

「コックニー詩派と出版社——19 世紀前半英国の出版事情」

早稲田大学非常勤講師 藤原 雅子

詩人ジョン・キーツ(1795-1821)の出版社として知られるテイラー&ヘッセ社にはキーツを始めハント、ハズリット、ラム、クレアなどの活動を支えた。テイラーは独自の文学観を持ち、当時論争になっていた諷刺作家 Junius の正体について文体分析に基く論文を発表するなど、文人としての側面を持っていた。彼が多くの作家と交流を持ち、積極的に作品の編集に関わった理由は彼自身の文学観、特に詩的言語に対する考え方にあり、そこに新しい文学創造への意志を見ることができる。弱小出版社が読者層を開拓し、作家を含めたゆるやかなネットワークを作ろうとした軌跡を、キーツの第三詩集の出版をめぐる事情とともに考察する。

「マーク・トウェインと 19 世紀後半アメリカの出版事情——予約出版・著作権を中心に」

大東文化大学准教授 中垣恒太郎

作家マーク・トウェイン(1835-1910)は予約出版ビジネスの急成長の中で生まれた。南北戦争後、歴史、自伝、回想記など本の内容が多様化し、また、元軍人が本を売り歩く外交員に採用されていたことなどによって、予約出版とその流通をめぐるビジネスは飛躍的に発展を遂げていった。とりわけ 1870 年からアメリカン・パブリッシング社の経営に携わったイライシャ・ブリスは、トウェインにユーモア旅行記を依頼し、『イノセンツ・アブロード』(*The Innocents Abroad*, 1869)を大ヒットさせ、さらにはじめての小説作品『金メ

ッキ時代』(*The Gilded Age*, 1873)をもたらしていることから、作家マーク・トウェインの「産みの親」とも言える大きな役割を果たしている。ブリスの出版ビジネス戦略を探る時、19世紀アメリカの出版界が何を求め、かつトウェインがいかにかその期待にこたえる形で作家としての成長を遂げていったのかが浮き彫りになるだろう。また、出版ビジネスで成功をおさめたトウェインは、未だ著作権が確立していなかったアメリカにおける著作権整備に尽力したことでも知られる。作家マーク・トウェインの出版ビジネスにおける軌跡を探ることにより、19世紀アメリカの出版事情を展望してみたい。

「予約購読者一覧にみる読者・支援者網の拡大——Helen Maria Williamsの詩集(1786年)の事例研究」

茨城大学准教授 小林 英美

本論で扱う「読者」は、18世紀末に予約購読出版を通して詩人を支えた資金援助者(patron)でもある。彼らは芸術家にとって必要不可欠な存在であったが、小説よりも読者が限定される詩というジャンルにおいては、他の読者にも影響力がある支援者を獲得することが、出版の成否を左右した。また、経済力が低い無名の詩人は、出版者にとって営業活動におけるリスクが少ないこの出版形式を、特に第1詩集において利用することがあった。

この予約者の一覧は、詩集自体に作品と一緒に印刷されるものであるが、これを精査すると、支援者の実態や支援者間の相互関係などがわかる。本発表では、18世紀末から19世紀初頭に活躍した英国女性詩人ヘレン・マライア・ウィリアムズ(Helen Maria Williams, 1761-1827)の予約者一覧を分析する。フランス革命に共鳴し、その後半生をフランスで過ごした彼女の人脈は広く、様々なジャンルの芸術家や思想家・政治家等に及ぶ。本発表は分析結果から得られたその人脈を明らかにした上で、その結果から推測される読者のネットワークの広がりの実態について論じるものである。

第119回例会 (2010.3.14. 於日本大学会館第二別館、以下同じ)

「初期アメリカ文学にみる「不道德な女」の形成——『シャーロット・テンプル』(1794年)『コケット』(1797年)」

東京理科大学非常勤講師 内堀奈保子

初期アメリカ文学は「不道德な女」の物語で始まったといっても過言ではない。ピューリタンの信仰が色濃く残り、小説は虚構として厭われていた一方で、誘惑され、墮落する「不道德な女」の物語が、婦女子のための「本当にあった」「悪いお手本」と銘打たれて大量に市場に出回っていた。本発表では、「感傷小説」と呼ばれるこうした「不道德な女」の物語が18世紀末のアメリカでなぜ大量に流通したのか、その受容の背景を、汎ヨーロッパ的な影響関係を明らかにしながら論じた。論考にあたっては、18世紀アメリカ文学の中でも先駆的な作品であり、また、「汚い本」でもある、スザンナ・ハズウェル・ラウゾンの『シャーロット・テンプル』(米版1794年)とハナ・ウェブスター・フォスターの『コケット』(1797年)を主に取り上げた。二つの初期アメリカ小説『シャーロット・テンプル』と『コケット』には、イギリスやフランスのリベラリズムに感化された女性登場人物が描かれていた。両作品が「不道德」を歴史化し、相対化して見せているという考察を通して、建国期前後のアメリカにおける感傷小説が、19世紀中葉に活発になっていく自由と平等を求める運動につながる文化装置の一部として重要な機能を果たしていたと結論づけた。

第 120 回例会 (2010.6.13.)

『実像への挑戦——英米文学研究——』合評会のため、研究発表なし。

第 121 回例会 (2010.9.13.)

『オリヴァー・トゥイスト』における語り手とオリヴァーの関係について

早稲田大学非常勤講師 水野 隆之

チャールズ・ディケンズの『オリヴァー・トゥイスト』は、月刊誌連載途中で短編小説から長編小説へと計画が変更されたことがその後の研究で明らかになっている。この変更に伴い、様々な物語が書き加えられ、主人公オリヴァーの存在感が徐々に弱まる結果となった。さらに小説の語り手の性質も変化し、語り手との関係においてもオリヴァーの存在が薄くなっていく。プロットが多岐にわたるにつれて、語り手の関心がオリヴァーから他の人物へと移っていくのである。本発表では、この点を作品中で用いられる 'history' という語の意味の変化に着目して検証してみた。

(司会 早稲田大学非常勤講師 田村 裕二)

関西支部第 24 回例会 (2009.9.10. 於同志社大学)

「シェリーは何をみたのか——ミルトンのセイタン像をめぐって」

同志社女子大学非常勤講師 江藤あさじ

ミルトンの描くセイタンは、シェリーに限らずロマン派の多くの詩人たちに影響を与えた。彼らはミルトンのセイタンに雄姿を見たのである。しかし、詳細に読めば、ミルトンが『失樂園』の至るところでそのことを否定する描写をしているのを我々は見ることが出来る。本発表では、神、神の子、そして精霊の関係と、セイタン、娘「罪」、そして息子「死」の関係が、相似形をとりながらも決して同じ関係には描かれていないことについて述べた。ミルトンが描く、神と神の子との従属的關係は、セイタンとその娘「罪」に一見当てはまりそうであるし、また『失樂園』の中でも「罪」が神の子よろしく神の右に座するといった描写もある。しかし、後者を結び付けているものは「運命」なのである。実際は運命ではなく神に他ならないのだが、地獄の住人達は運命こそが絶対的支配者であるという誤った認識のもとに結束しているのだ。しかしその「運命」を、実はミルトンは強く否定しているのである。すなわち、一見天上の神と地獄のセイタンは、ともに対照を成す世界の頂点に君臨するもののように描かれているのだが、実のところそのセイタンの姿は、神の完全なパロディーとして描かれているのであり、「運命」という彼らの存在の土台さえ、単なる錯覚にすぎなかったのである。

(司会 龍谷大学非常勤講師 藤井 晶宏)

併せて近畿大学非常勤講師・横光利一文学会運営委員の黒田大河氏による講演「横光利一『純粹小説論』考——「第四人称」の可能性をめぐって——」(司会 甲南大学非常勤講師 吉田一穂氏) が行われました。

2009 年

第 1 回年次大会 (2009.12.13. 於日本大学文理学部)

〈研究発表〉

Hawthorne の“*My Kinsman, Major Molineux*”における一考察

—— Robin の独立への旅を中心に ——

玉川大学非常勤講師 西山 里枝

ホーソーンの初期の短編「僕の親戚モーリノー少佐」(“*My Kinsman, Major Molineux*”)には、田舎から出てきた純朴な青年ロビンが町で様々な経験を経て、縁者モーリノー少佐に再会する過程が描かれている。町でロビンの辿る道程は自己探求、そして独立への旅であり、作品全体を通し様々な象徴性や歴史との関連性も見られる。また、ホーソーンは人間の心の奥底にある邪悪な性質を史実と絡み合わせ、物語のあらましに現実味を与えている。本発表では、この作品を後の多くの作品で描かれる様々な主題の萌芽となるものを含んでいるものと捉え、ロビンの旅に着目しながら真の創作意図を考察する。

(司会 東京理科大学非常勤講師 内堀奈保子)

Jane Eyre における心——魂と身体の狭間で

桜美林大学准教授 大竹麻衣子

『ジェイン・エア』における心と身体の関係の捉え方を、18 世紀末から 19 世紀前半における心をめぐる科学的・宗教的論争の文脈において検証する。この時代の心の科学の主流が、必ずしもキリスト教と対立するものではなく、また、その発想においてロマン主義的な側面をもっていたことをふまえることで、『ジェイン・エア』における科学と宗教という 2 つの認識上のパラダイムが交錯する心身の描き方は、ブロンテ個人の特異な発想によるものではなく、ブロンテが生きたロマン主義からヴィクトリア朝への過渡期における世界観および人間観を示すものであることを明らかにする。

(司会 松山大学専任講師 新井 英夫)

〈シンポジウム要旨〉

西洋の 17 世紀における「煉獄」図像について・・・ヴィーリクスとその影響

日本大学教授 木村 三郎

LE GOFF が、1981 年に刊行した『煉獄の誕生』(邦訳、1988 年)は、その神学論争に関する該博な教養に圧倒される著作である。近年、GÖTTLER(1996 年)は、トリエント公会議以降のこの図像論に、ル・ゴフに続く浩瀚な研究書を刊行している。当該発表では、その見解を踏まえ、煉獄図像についての基礎調査の成果を報告したい。主に、フランス国立図書館版画室収蔵のフランドルの版画家ヴィーリクスの版画の意味するところと、それが及ぼした広範な影響について紹介したいと思う。フランドルの画家ルーベンスだけでなく、イベリア半島だけでなく、極東の日本にする関与したイメージのありかたについてである(参考資料・拙著『ニコラ・プッサンとイエズス会図像の研究』2005 年)。

「捨てられたプシュケ」——18世紀フランス絵画とラ・フォンテーヌ、モリエール

日本大学非常勤講師 安室 可奈子

古代ローマ時代に誕生したプシュケの神話は、1669年、ラ・フォンテーヌにより翻案された。さらに同時代、モリエールのバレエ舞台として上演されることとなる。こうした文学的・演劇的背景により、18世紀下のフランスでは「プシュケとアモル」が神話画の主題として大変流行した。しかしたとえば「捨てられたプシュケ」の情景に注目して見ると、ロココ絵画と新古典主義絵画のそれでは、とりわけ構図上の大きな違いがみとめられる。本発表では、ラ・フォンテーヌとモリエールのテキストを比較しつつ、それらがどのようにプシュケ図像の成立に影響していたのかについて論じたい。

ターナーの《イングランド：摂政皇太子誕生日のリッチモンド・ヒル》(1819)の解釈：
風景版画との関連から

武蔵大学非常勤講師 出羽 尚

J.M.W.ターナー [1775-1851] が1819年のロイヤル・アカデミー展に出品した《イングランド：摂政皇太子誕生日のリッチモンド・ヒル》については、作品の主題に注目した研究がなされてきたが、本発表は、この作品の構図に注目する。この構図は、18世紀から盛んに出版された旅行本の挿絵として制作されたリッチモンドの風景版画の構図を引き継いでおり、構図自体に同時代の視覚的意味が付与されていた可能性を指摘したい。

キーツの《蝶》と《鳩》——「プシュケーへの賦」を中心に

日本大学教授 植月 恵一郎

イギリス・ロマン派の詩人ジョン・キーツの「プシュケーへの賦」に登場するプシュケーは《鳩》である。ところが、同時代のコールリッジ、ワーズワスらは《蝶》を用いている。またほぼ同時代の絵画、彫刻でもプシュケーには《蝶》を配してあるのがふつうであった。キーツに影響を与えた先行詩人メアリー・タイが『プシュケー』の中で《鳩》としているためにキーツもそれに倣ったのだとする解釈で事足りりとしてきたが、本論では新解釈を試みる。つまりキーツの中世趣味が大きく影響している点、異教の伝統にキリスト教の伝統を織り込もうとした点である。

第117回例会 (2009.3.8. 於日本大学文理学部、以下同じ)

「詩人アン・グラントと19世紀初頭スコットランド文芸サークル——詩集の予約出版をめぐって」

茨城大学准教授 小林 英美

本発表は、スコットランド女性詩人アン・グラント (Anne Macvicar Grant, 1755-1838) の『様々な主題による詩集 (*Poems on Various Subjects*)』(1803年)の出版を支援した読者層を調査・分析し、当時のスコットランド文芸サークルの一端を、具体的な事例によって明らかにしようとするものである。

本発表では、まず上記詩集の出版に至るグラントの半生と作品の傾向等を概説した。10代をアメリカで生活し、その後はスコットランドのハイランドで生活したことは特筆すべき点である。次に当該詩集付属の「予約購読者一覧」の分析結果を公表した。バーンズやベイリー等の詩人やスコットランド知識層を中心にした広い人脈が明らかになった。また

その人脈はオーストリアのハイドン等に繋がる国際的なものであったこともわかり、予約購読出版が伝達メディアとしての大きな影響力を秘めていることも明らかになった。

(司会 早稲田大学非常勤講師 大西 章夫)

第 118 回例会 (2008.6.14.)

『骨董屋』におけるネルの役割：トレントを中心として

日本大学大学院 角田 裕子

チャールズ・ディケンズ(Charles Dickens, 1812-70)の長編小説第 4 作『骨董屋』(*The Old Curiosity Shop*)は、週刊誌『ハンフリー親方の時計』(*Master Humphrey's Clock*)に 1840 年 4 月から 41 年 2 月まで連載された小説である。

ネル(Little Nell Trent)の死は、長い間、議論の的となっていた。代表的な例を挙げれば、そのあまりにも感情的な描写が特に非難の中心となっている。しかし、先行研究で一貫しているものがある。それは、ネルを死へと追いやったのはトレント(Trent)だということである。確かに、ネルを放浪の旅に出させ、行く先々で苦しませ、挙句の果てには死なせてしまう原因はトレントの賭博癖である。しかし本発表では、そのトレントの過去、特に彼の娘、即ちネルの母親の境遇、及びそれに関する彼の言及に焦点を当てた。そうすると、彼が賭博に走るようになった動機が自ずと分かるようになる。『骨董屋』の時代背景は、イギリスのヴィクトリア朝である。この時代はまさしく拝金主義であり、その様子が色濃く『骨董屋』に反映されている。つまり、トレントのような人物を生み出してしまうのが拝金主義のヴィクトリア朝なのだが、ディケンズは単にそんなトレントを提示するだけで風刺しているのではない。ディケンズは、トレントとネルの間に金銭と幸福に関する考え方の隔たりを生じさせ、皮肉を演出する。この皮肉が『骨董屋』の先行研究では議論されておらず、本発表で指摘した。

(司会 早稲田大学非常勤講師 水野 隆之)

関西支部第 22 回例会 (2009.4. 2. 於同志社同窓会館)

「ディケンズと精神的外傷」

甲南大学非常勤講師 吉田 一穂

チャールズ・ディケンズの生涯を考えると、決して忘れてはならない過去の記憶がある。それはディケンズが 12 歳のとき、父親が借財不払いのため家族がマーシャルシー監獄に入り、家族と離れて靴墨工場へ働きに行かなければならなかったという記憶であり、このことはディケンズの生涯の間ずっと精神的外傷として残った。発表では、主に『リトル・ドリット』(1857)と『二都物語』(1859)において、どのように精神的外傷とその影響が表れているかについて考察した。

(司会 龍谷大学非常勤講師 藤井 晶宏)

関西支部第 23 回例会 (2008.9. 9. 於同志社今出川校地)

「対置する写真——*The Tragic Muse* にみる James の過去の感覚」

ノートルダム清心女子大学准教授 中村 善雄

本発表においては、Henry James の長編 *The Tragic Muse* における写真に焦点を当て、ジェームズの美学ならびに現実認識について論じた。この作品には写真のイメージを帯びた 2 人の人物、つまり Gabriel Nash と Miriam Rooth が登場するが、そのイメージは対象的である。審美主義者である画家 Nash はモノ・メディアである銀板写真のイメージを帯び、彼の突然の「消滅」は「美しく失われた芸術」である銀板写真の性質と重ね合わされ、19 世紀最後の四半世紀において芸術そのものの自立性の保持が困難な状況を物語っている。一方、新進女優の Miriam はマス・メディアである大量の写真に囲まれ、彼女の演劇世界が写真や広告と不可分であり、大量複製時代の申し子と化している。James はこの二人の登場人物を対照的な写真イメージと絡めることで、作家として審美的な芸術世界を描きたい想いと、リアリストとして芸術世界が否応なく宣伝広告に蹂躪されている現実を描かなければならない想い、この相克する感情を *The Tragic Muse* に織り込んでいると結論づけた。

(司会 甲南大学非常勤講師 吉田 一穂)

2008 年

第 113 回例会 (2008.3.9. 於日本大学文理学部、以下同じ)

「エミリ・ブロンテとロマンティズム」

日本大学大学院 山本由布子

エミリ・ブロンテは、ヴィクトリア朝の幕開けとともにロマンティズムの勢力が衰退する一方で、新たな思潮が行き交う時代を生きたとと言われる。ブロンテの作品『嵐が丘』ではロマンスが否定される。ヒースクリフは、イザベラの自分に対する愛を、自分を「ロマンスの主人公」に仕立て、「騎士ふうの献身的な愛」を求めるものとして嘲笑する。また、彼は、他の登場人物の愛、エドガー・リントンのキャサリンに対する愛、リントン・ヒースクリフのキャサリンの娘キャシーに対する愛も、「ロマンス」の類として破壊する。このヒースクリフの物語の引き立て役となるのは、語り手ロックウッドであり、彼は「ロマンティック」な夢を持つ軽薄な人物として描かれる。このように、ブロンテはヒースクリフを通してことごとくロマンティックな精神を否定する。ロマンスを否定することによって生み出される『嵐が丘』のエネルギーが、ブロンテ独自の世界を構築していることを考察した。

(司会 日本大学准教授 関田 朋子)

第114回例会 (2008.6.8.)

「ガンジーとエコロジー」

日本大学非常勤講師 奥井 裕

ジョージ・オーウェルの最後の評論「ガンジーについての感想」(1949)をもとに今日、ガンジーから学ぶことの出来る「エコロジー」的な事柄について幾つか考えてみた。ガンジーの現世の否定と来世志向、あるいは菜食主義、殺生の禁止などをそのまま受け入れるのは不可能に近い。しかし、先進国の欲望充足主義にも一定の歯止めが必要であるのは言うまでもない。ガンジーの考え方は我々現代人にそのことを、更に「快樂の追求は苦痛の追求であり、便利さの追求は不便さの追求であること、効率の追求は非効率の追求である」

ことを教えてくれる。例えば、医学の進歩と衛生状態の向上により平均寿命は伸びたが、その為に人間の抵抗力は衰え、新たな遺伝病が次々と出現している面も否定出来ない。

地球的規模の環境汚染、温暖化、様々な耐性菌の出現など深刻な問題が次々と出てくる現代に於いて、ガンジーの考え方は一考するに値すると言えるだろう。

(司会 早稲田大学非常勤講師 大西 章夫)

第115回例会 (2008.9.14.)

「Charlotte Brontë と観相学／骨相学: *The Professor*と*Jane Eyre* における自己と身体」
桜美林大学専任講師 大竹麻衣子

Charlotte Brontë の作品における人物描写に19世紀半ばの英国で大流行した観相学 (physiognomy) や骨相学 (phrenology) の影響がみられることはよく知られている。観相学は人物の容姿全般から、骨相学は人物の特に頭部の形状から、その気質や才能を読み取ることができるという考え方にもとづく理論である。ともに人間の心に関する「科学」として、ヨーロッパから英国に伝わり、中産階級を中心とする人々の間で広く受け入れられ、大きな文化的影響力をもったが、その後、急速に廃れていった。

本発表では、観相学や骨相学の理論を同時代の人々の認識上のパラダイムに影響を与えたものと位置づけ、これらの理論が示唆する人間観や世界観の影響という観点から、二つのブロンテの作品——*The Professor* (1857)と*Jane Eyre* (1847)——における自己 (self) と身体 (body)、身体と心 (mind) の関係の捉え方を検証する。両作品における観相学や骨相学の概念の用い方は、これらの理論がブロンテによって受容され、独自の人間観や世界観が構築された過程を明らかにするだろう。

(司会 松山大学専任講師 新井 英夫)

第116回例会 (2008.12.9.)

「時間を旅する家族の物語」

日本大学専任講師 堀切 大史

本発表では、アメリカの作家ジョン・アーヴィングの小説『ホテル・ニューハンプシャー』(1981)を、「時間」をテーマに論じた。この小説は、同性愛、近親相姦、小人症、難聴など、様々な問題を抱えたベリー家という家族の物語で、その中心人物は、タイトルにもなっているホテル・ニューハンプシャーを運営している父親のウィンスローである。彼のホテル経営のきっかけとなったフロイトとのアーバスノット・ホテルでの出会い以来、ホテル・ニューハンプシャーはウィンスローにとって「夢」の象徴となるが、フロイトの後を追ってウィーンで開業した第二次ホテル・ニューハンプシャーは、新世界アメリカから旧世界ヨーロッパへという、「過去」への時間の旅となり、さらに、フロイトとの思い出の場所で開業した第三次ホテル・ニューハンプシャーもまた、ウィンスローの目が見えなくなったことから、経営者本人だけが知らない、架空のホテルとなり、いよいよ象徴的な意味での「記憶」のホテルとなる。新世界アメリカと旧世界ヨーロッパの往復という時間的な旅をとおして、様々な経験をして成長してゆく家族の姿から、ホーソーンやジェイムズによるアメリカのロマンスの伝統を読み取ることができる。

(司会 日本大学助教 中村 文紀)

関西支部第20回 (2008.3.28. 於同志社同窓会館、以下同じ)

「メアリ・ウルストンクラフトと背景としての母親」

京都女子大学博士課程学位取得終了 末森 恵子

ウルストンクラフトにとって問題となる「母」には、1. ウルストンクラフト自身の母、2. 母としてのウルストンクラフト、3. ウルストンクラフトの作品に描かれた母、が存在する。弱い存在としての女性を体現したような自身の母に対してというよりも、理性的で愛情深い理想の母親像を作り上げることにウルストンクラフトは娘としての自分を認めている。また小説では、女性の不幸の一因として「母からの教えが受けられなかったことの悲劇」を彼女は描き、受け継がれる不幸の連鎖を娘に教えを与えることで断ち切るという選択を母の立場から与えている。さらに物語にヒロインの友人である「二番目の母」を登場させることでウルストンクラフトは女性の中に精神的な意味での「母」を見出しており、それが「娘」の共有を通じた女性同士の新たな関係性の構築へと発展している。以上三つの「母」という観点からウルストンクラフトのフェミニズムについて考察した。

(司会 同志社女子大学非常勤講師 井上 径子)

関西支部第21回 (2008.9.16.)

「サナトリウムにおけるモームの人間観察」

関西大学非常勤講師 西紋 茂樹

モームの短編「サナトリウム(1938)」は、実在したスコットランドのサナトリウムを舞台にしていて、当時まだ劇的な治療薬もなく、不治の病であった結核とそれがもたらす死の恐怖に、作者自身も向き合いながら執筆した佳作である。モームはそれまでことあるごとに「病人が病気ゆえに我儘に、狭量になるのは仕方がない」と書いてきた。死への怯えが、ある人の人格を歪ませても、それは致し方ないことだ、というわけだ。しかしこの小説には、死神を怖れず、恐怖とたわむれる一人の男が登場する。死もついに彼の人格を歪ませることはできない。発表では、モームがこの男を造形した意図について、私の所見を述べた。

(司会 同志社女子大学非常勤講師 江藤あさじ)

2007 年

第109回例会 (2007.3.11. 於日本大学文理学部、以下同じ)

「Edwin Muir の詩と言語思想」

日本女子体育大学専任講師 加賀 岳彦

カフカの翻訳者としても知られるオークニー諸島出身の詩人 Edwin Muir は、終生母国スコットランドに対して批判的・非帰属的であった。その詩において彼はスコットランドの伝統的な情緒から離れ、奇妙で乾いたイメージと複雑で多層的なアレゴリーで、文化的に自閉・停滞したスコットランド像を描き出した。また評論 *Scott and Scotland (1936)* では「スコットランドの作家はスコッツではなく英語(イングリッシュ)で書くしかない」

と主張し、スコティッシュ・ルネサンス運動に水を差すと同時に非国民扱いされた。しかし Muir が提示した《反》スコットランド観は、その後のスコットランドのナショナリズム論・ポストコロニアル論において論争の「地雷原」的存在としていまだに言及・議論され、その価値は近年ますます評価されるようになってきている。本発表では、Muir の中期の短詩数編および言語論を通して、スコットランドにおける言語の問題、カルヴァン主義の問題、バーンズ、スコットの神格化の問題、およびなぜ Muir は《外国》で評価されるのか、などを検討した。

(司会 早稲田大学非常勤講師 大西 章夫)

第110回例会 (2007.6.10.)

「オーウェルの『ガンジー論』」

日本大学非常勤講師 奥井 裕

オーウェルは社会主義者であり、基本的には宗教を否定する立場だったが、最後の評論の中でガンジーを取り上げ、彼の行動と精神を肯定的に評価した。今回の発表では、晩年のオーウェルが自分と対極にあるガンジーを評価した理由について考察を加えた。

スペインから帰国後、オーウェルは以前にもまして人間の権力欲の問題と宗教の衰退の問題に取り組んだ。しかし、これらの問題に解答が出せなかったことと、宗教に代わる新たな善悪の体系もみつからなかったことが原因して、彼は次第に袋小路に入ってしまった。それはオーウェルにとって、権力志向や全体主義的な思考の蔓延を防ぐ手段がないということの意味するものであったが、このような状況のもと、ガンジーは政治的な大気の消毒をし、インドの平和的な独立という大きな成果を出した。ガンジーにそれが出来た最大の理由が、オーウェルの否定した「非人間的な聖人性」にあるのは皮肉と言わざるをえない。だが、平和的な独立を見事に果たした事実を重くみたオーウェルは、最終的にはガンジーに対して一定の敬意を払わずにはいられず、死の直前、この評論をしたためたのである。

(司会 早稲田大学非常勤講師 水野 隆之)

第111回例会 (2007.9.9.)

「*Cane* (Jean Toomer) 第1部の比喩的表現について」

ロンドン大学大学院 近藤 直樹

今回の発表では、ジーン・トゥーマー(1894-1967)の『サトウキビ』(1923) 第1部に頻出するイメージの意義を考察した。第1部を構成する短篇小説や詩には、アメリカ南部の風景を彩る煙、松、サトウキビ畑、夕暮れ、月などがくりかえしあらわれ、隷属状態に置かれる黒人やムラート、特に女性の黒人やムラートの哀しみと重ね合わせて描かれている。これらのイメージがモザイクのように組み合わせられ、美しくも哀しみに満ちた南部の風景を現出させていることを、さまざまな場面を分析して示した。

(司会 早稲田大学非常勤講師 水野 隆之)

第112回例会 (2007.12.9.)

「キャサリン・マンスフィールド「園遊会」——階級差を越えるローラの眼差し」

神奈川県立神奈川総合産業高校教諭 加藤 良浩

「園遊会」では、労働者スコットの悲しくも、静かで美しい死を見たローラが、兄のローリーに向かって「ただすばらしかったのよ、人生ってというのは」と言葉にできない感動を示す場面で終わっている。従来、ローラがこのような言動をする原因については、階級差によってもたらされる虚構と現実の対比を通して、人生の現実に目覚めたローラの姿を描いているといった見解が示されているが、この階級が引き起こす問題とローラが抱く死の認識と結びつけることにより、より明確な解釈が可能になる。つまり、ローラが言葉にならない感動を示すのは、階級差を乗り越えようとしながらもそれができないでいる彼女が、階級差を一瞬にして解消する、悲しくも厳粛な死の存在を無意識のうちに感じ取るからである。と同時に、そのような死の対立物としての崇高で喜びに満ちた生の存在、さらには人間存在の生における本質的平等を無意識のうちに感じ取ったからである。

(司会 拓殖大学非常勤講師 近藤 直樹)

関西支部第19回例会 (2007.9.14. 於同志社同窓会館)

「*The Lost Girl* における Alvina の旅——自意識を超えて」

同志社女子大学非常勤講師 井上 径子

The Lost Girl の主人公 Alvina は、イタリア人 Ciccoとの結婚後、夫に伴いイギリスを離れ、夫の故郷の山村に赴いて生活することで一種の変容を遂げている。レデイ・トラヴェラーと呼ばれる多くのイギリス人女性たちが、帝国の外に居場所を見出そうとした時代(1870年代から第一次大戦が勃発する1914年にかけての時代)にあり、Alvinaの旅は、レデイ・トラヴェラーたちの旅と主旨は異なるにせよ、“lady”である以上イギリスにいる限りは、自らのジェンダーに課せられた「固着性」(sessility)という論理の外に出ることが不可能であった時代において、「移動」という旅を通して、Alvina がいかにヨーロッパ人女性としてのアイデンティティ、ひいては自意識の呪縛を脱却していったかを論じた。

(司会 同志社女子大学非常勤講師 江藤あさじ)

2006年

第105回例会 (2006.3.12. 於日本大学文理学部、以下同じ)

「ホーソーントンと罪——「幸運なる墮落」に関する一考察」

麗澤大学大学院 富樫 壮央

ナサニエル・ホーソーンの『大理石の牧神』(1860年)を題材に、イタリア人青年ドナテロの罪を巡る解釈について論じた。ある日、三人の友人と芸術家の集いに参加したドナテロは、その帰途、ミリアムに付きまとうモデルの気配を察知し、彼を崖から突き落としてしまう。しかしこれを境にドナテロは大きな変貌を遂げることになる——無垢な性質が失われ、知性が芽生え始めるのだ。ミリアムはこれを「幸運な墮落」と呼び、ケニヨン、ヒルダはその解釈をめぐる対立していくが、作者の筆はどちらを優位に立たせるわけでもなく、その答えも明らかにしていない。こうした曖昧さは読者や批評家を惹きつけるゆえんでもあるのだが、論者が注目したいのはドナテロの収監という結末であり、「幸運なる

墮落」についての判断を留保しながらこれを明らかにしたことは、ドナテロの行為が罪に他ならないということ、そしてホーソーンの「罪」に対する強い意識のあらわれといえよう。

(司会 日本大学助手 堀切 大史)

第106回例会 (2006.6.10.)

「アン・ブロンテの『アグネス・グレイ』における〈語り〉の本質」

日本大学大学院 新井 英夫

これまで多くの批評家が、『アグネス・グレイ』に対し、下記の二点を中心に論を展開し、一定の評価を与えてきた。第一に、当時の女性の家庭教師の生活を忠実に描いたリアリズム小説として評価できる点、第二に、何もすることができなかつたアグネスが、より広い世界で家庭教師としての経験を積み、成長する教養小説として評価できる点である。確かにいずれの評価も、語り手が語るアグネス像を信頼し、その語り即ちした評価を行っているため説得力がある。しかしいずれの批評も、「自叙伝体」というこの小説の語り的手法が持っている、語り手本人の心理を奥底まで表すという特性を無視している。『アグネス・グレイ』で一貫して論じられてきた主題は、末娘という立場によって被ってきた不当な評価を覆し、「一人の立派な大人」としてのアイデンティティを獲得したいというアグネスの一念に絞られている。彼女はこの大望を達成するために、本来の自分の心理や行動と異なるにも拘らず、自分を「敬虔で常に道徳的に正しく生きる」人物であるかのように映し出し、自分の家族だけでなく、読者にも自分の価値を認めてもらおうと、必死に叫び続けていた。

作者アン・ブロンテは、「自叙伝体」という語り的手法が持つ特徴を巧みに利用することで、アグネスの内面生活や心的状況を克明に描き出すことに成功した。この点において、本小説を近代的心理小説の先駆けとして高く評価することができる。

(司会 早稲田大学非常勤講師 杉本 一郎)

第107回例会 (2006.9.10.)

「*Stranger Tales from Humble Life* 試論」

日本大学文理学部助教授 閑田 朋子

本報告では、ジョン・アッシュワース (John Ashworth) 作『つつまじやかな生活の不思議な話』を扱った。この作品はヴィクトリア朝に出版されたが、現在では読まれることがなく、作家・作品に関する20世紀以降の研究はほとんどない。そこでこの作品の特徴を報告し、文学史および社会史的に位置付ける試みを行った。

発表の筋道としては、まずこの作家が現在、どのように受容されているのか、つまりその認知度の低さを報告し、それにも関わらず完全に忘れられているわけではない理由を挙げた。次に作家の経歴を、第三に本作の当時の出版形態と出版部数を報告し、第四に読者層の同定を行った。最後にテキスト(内容)の特徴を述べ、結論として本作家および本作を、同時代の比較的分野が近いと思われる他作家・他作品と比較し、文学史・社会史的にみた本作の重要性を述べた。

(司会 早稲田大学非常勤講師 水野 隆之)

第108回例会 (2006.12.10.)

「リー・ハント『リミニ物語』の語り」

早稲田大学非常勤講師 藤原 雅子

リー・ハントの『リミニ物語』は、道徳性の希薄さ、不自然な韻律法を当時の文芸雑誌から批判された。当発表ではこれらの特徴をむしろ積極的に評価する方向で論を進める。具体的には、作品のプロット、イメージ、韻律法がどのように作品の語り(ナラティブ)に寄与しているかを検証する。

作品に見られるいくつかの特徴(歴史的文脈のなさ、過剰な描写、不自然な韻律、進行の遅さ)は、読者に作品の細部を味わうことを強要し、容易に結末へ向かわせない。このような作者の「圧力」は、読者を自らの美的世界へと導きつつも、彼の語りについていける、つまり同じ美学を共有する者だけを読者として選ぶ、という態度の現れである。この点については、作品中に散りばめられた bower (あずまや) のモチーフに注目することでその点を説明することができる。

宗教的道徳性・倫理性ではなく、審美性がものをいう時代、モラルが個人の心と「美学」の問題となりつつある時代をこの作品は体現していると考えることができる。

(司会 早稲田大学非常勤講師 大西 章夫)

関西支部第17回例会 (2006.7.15. 於YMCA国際文化センター[大阪市]、以下同じ)

「『バーナビー・ラッジ』にみる国家の姿」

龍谷大学非常勤講師 藤井 晶宏

『バーナビー・ラッジ』は、18世紀終盤のゴードン騒動を舞台にしたディケンズの歴史小説。ゴードン騒動は、カトリック反対を契機に起き、やがて多くの庶民を巻き込み、誰にもそれを止めることができないほどの勢いをもつようになり、多くの死傷者を出したが、最終的には国家の強力な軍隊による武力の行使によってようやく鎮圧された暴動のことである。

こうした暴徒の鎮圧という行為において見られる国家の姿を、マックス・ウェーバーがいう国家、つまり「正当な物理的暴力行使の独占を(実効的に)要求する人間共同体」という定義を入り口にして、暴力との関係から考察した。国家は、自らの強力な力を背景にした「正当な」法の下で、暴徒を拘束し死刑にするという暴力を合法化している存在だといえる。ただ、暴徒の暴力だけでなく、それらを罰する法も肯定しないディケンズは、そうした法を無効にできる王を国家が擁していることも描いており、そこでは国家を肯定的にとらえる面も見せていると言える。

(司会 同志社女子大学非常勤講師 江藤あさじ)

関西支部第18回例会 (2006.9.23.)

「ミルトンの律法観」

同志社女子大学非常勤講師 江藤あさじ

ミルトンの著書『キリスト教教義論』には、「律法が神と人間との間の契約を全て反故にしてしまう」といったことが述べられている。そして同じくミルトンの作品である悲劇

『闘技士サムソン』は、律法違反により呵責の念に苛まれたサムソンの姿から開幕する。この物語は、聖書の士師記という旧約の物語が題材となっている。『樂園の喪失』ですでにキリストによる律法の無効化を説いていたミルトンは、律法に生きた時代のサムソンの物語を執筆した。今回の発表では、『闘技士サムソン』は、律法から解放されて、再び神によって義と認められ、そして神との最初の契約をサムソンが取り戻していく姿を描いたものであると仮定し、それを考察した。

(司会 龍谷大学非常勤講師 藤井 晶宏)

2005 年

第101回例会 (2005.3.13. 於日本大学文理学部、以下同じ)

「マンスフィールドの「カナリア」について」

日本大学非常勤講師 奥井 裕

「カナリア」は、マンスフィールド最後の作品である。内容的には、主人公の老婆が、「孤独な境遇の中で、カナリアと出会い、強い絆で結ばれたこと。そしてカナリアの死と寂寥感」を淡々と述べていくというものであり、物語自体は単純である。また、作品の主題も「生あるものは、愛する対象を求めずにはいられず、それがなければ、悲しみから逃れることは出来ない」という、それ自体は単純明解なものである。しかし、これまでの研究では、主題の意味するものが、かなり見落とされているように思う。また、「形而上的な人生論」「シンボリズム」「実験的な手法」「チャーホフ的な要素／手法」といったことばかりが、必要以上に述べられる一方、何故そのような「手法」が作者に必要だったのか、ということになると、突っ込んで言及し、且つ説得力のある研究が少ないことも否めない。

今回の発表では、原文を徹底的に精読することによって、作品の(単純ながらも)非常に奥深い主題の意味を明らかにし、併せて、新趣向の文体と形式が用いられた理由についても考察を加えた。

(司会 早稲田大学非常勤講師 水野 隆之)

第102回例会 (2005.6.12.)

「オーウェルの初期の小説」

早稲田大学非常勤講師 大石 健太郎

『動物農場』『1984年』の著作者として知られるジョージ・オーウェルの初期作品についてのコメント。政治的作家だと思われているオーウェルには思いがけない一面、ひどく叙情的な一面があったことは比較的知られていない。オーウェルは若き日、植民地英領インド帝国の一属領であったビルマに、警察官として五年七カ月の日々を送った。そこでオーウェルが見た植民地の圧政、搾取、人権の抑圧がオーウェルを後年の執筆生活に駆り立てる素因となった。ビルマでの生活を描いた作品『ビルマの日々』から政治的示唆に満ち溢れた『動物農場』『1984年』を類推することは難しい。そこにあるのは「華麗な文章」、「美しい自然の風景描写」、「異国情緒」漂う風物の描き出す異世界である。またそれは入り組んだ恋の鞘当てと陰謀、冒険の世界でもあった。そしてオーウェルの持つ優しさ――

弱きものへの肩入れ、「負け犬礼讃」が全編に帳る。ここからオーウェルは出発した。そして『カタロニア讃歌』『動物農場』『1984年』という変遷を経て、やっと念願の自然主義的大河小説を書くことに戻る寸前にして、命運尽きてしまった。やり残したことの多かった作家オーウェル、自分の意図とは違ったところで評価されてしまった作家オーウェル、この作家の本質をここに見たいと思う。

(司会 早稲田大学非常勤講師 近藤 直樹)

第103回例会 (2005.9.11.)

「チャールズ・ブロックデン・ブラウンにおける「共感」の両義性」

中央大学非常勤講師 平野 正樹

1980年代以降文学批評の分野において「センチメンタリズム」の見直しが行われてきた。またその流れと連動して、18世紀に主に女性によって書かれたセンチメンタル小説の再評価も進んできた。しかし18世紀当時の「センチメンタリズム」は、現在とは異なり道徳的な感情という意味合いが強く、ジェンダーにかかわらず社会的に共有されていた感情であった。本発表では、18世紀末のゴシック小説家という観点から語られることの多いチャールズ・ブロックデン・ブラウンの作品にも、当時の「センチメンタリズム」が色濃く反映されていることを主張したい。アダム・スミスの『道徳感情論』に見られるように18世紀においては他者への「共感」は人間本来の「自然」な感情とされたが、その反面、他者への過度な共感的同一化は、アイデンティティの喪失という危険性を伴う。また、他者に共感されることを目的とする人工的な感情の演出は、皮肉的にも他人同士の間にも演劇的な関係を生み出してしまう。このような「共感」がもつネガティブな特質が、他者に共感するあまり最終的にはインディアンと化してしまう『エドガー・ハントリー』や、当時の雄弁術や腹話術を駆使して家族を誘惑する『ウィーランド』などの作品によって描かれている、と論じたい。

(司会 日本大学助手 堀切 大史)

第104回例会 (2005.12.11.)

「Herman Melville の “The Bell-Tower” を読む レトリカル・ナレーター」

明治大学非常勤講師 奈良裕美子

ハーマン・メルヴィル作「鐘塔」の三人称の語り手は、一見単なるストーリー・テラーとしてバンナドナナの物語を客観的に語っているようで、実際は、彼に対する共和国の人々の解釈を多々紹介するという、共和国の「スポークスマン」の役割をも担っている。バンナドナナの鐘と鐘塔建造の真の動機・目的に関する説明は殆ど共和国の人々の解釈で構成され、その膨大な説明の根拠は、矛盾を内包し、あいまいで推測だらけであるにもかかわらず、極めて「具体的」、「論理的」に提示される。このレトリカルなプロセスにより、この作品は奴隷制度批判やテクノロジー批判を中心に扱った物語というより、バンナドナナ「個人」の「高慢」や野心に伴う破滅・報いといった警告・教訓物語であるという印象が濃くなっている。メルヴィルは語り手の複雑なレトリックを通して物語の焦点をバンナドナナ個人を例とした教訓物語へと巧みに移し、奴隷制・テクノロジーの問題を直接的に提起することを回避しながらこの物語を構築しているといえる。

(司会 日本大学非常勤講師 中村 文紀)

関西支部第15回例会 (2005.3.31. 於同志社大学田辺校地)

「ディケンズとスマイルズ」

甲南大学非常勤講師 吉田 一穂

ヴィクトリア朝時代の価値体系と道徳的指針に甚大な影響を与えた作品に、サミュエル・スマイルズの *Self-Help* (1859) がある。人々が自助努力によって生きるべきだというアドバイスを労働者階級・中産階級の人々に与えているが、チャールズ・ディケンズはスマイルズに言われるまでもなく、自助の精神を人生において実践して見せた作家である。それは自伝的小説 *David Copperfield* を見ればあきらかである。

ジェローム・メキアは論文 “*Great Expectations and Self-Help: Dickens Frowns on Smiles*” の中で、*Great Expectations* においてディケンズがスマイルズに難色を示している、ジョー・ガージャリーを用いて ‘self-help’ の概念をあざけていると述べているが、この見解は *Self-Help* の中で取り扱われている「人格的向上」を無視した見解と言わざるをえない。発表では、作品をテーマである「本当の紳士とは?’という観点から考え、ディケンズが *Great Expectations* においてスマイルズと同じ見解を述べていて、決して難色を示しているわけではないことについて述べた。

(司会 龍谷大学非常勤講師 藤井 晶宏)

関西支部第16回例会 (2005.10.23. 於同志社大学今出川校地)

「教養小説としての『高慢と偏見』」

京都女子大学大学院 末森 恵子

女性にとって教養小説とは長い間、幸福な結婚に向けて「ふさわしい」女性像を作り上げることを目的とするものであった。その中核には、全てが男性に関連づけられて考えられた女性教育が存在する。多くの教育書や小説がそれを謳う中、『高慢と偏見』は、ヒロインが「か弱く従順な女性」像に向けてではなく、時代の理性尊重主義を反映した「理想的な人間」へと成長していくことを主題としている。一方でこの小説はまさに幸福な結婚を結末とし、一見その伝統の範疇から出るものではないかのようなようである。だがむしろここでは、結婚に向けて成長していくという教養小説の枠組は、その裏でほかの女性たちとの対決や連帯を描くための装置として用いられている面はないだろうか。特にエリザベスとジェーンの姉妹の絆を、互いに高める対等なパートナーシップへの可能性として捉え、そのような女性教育観が新たな教養小説としての価値をこの作品に与えているとする観点を提示した。

(司会 同志社女子大学非常勤講師 江藤あさじ)

2004 年

第97回例会 (2004.3.14. 於日本大学文理学部、以下同じ)

「*Far from the Madding Crowd* 試論」

日本大学大学院 杉本 宏昭

本発表では、Thomas Hardy の長編小説 *Far from the Madding Crowd* において、登場人物たちが対象を「見る」時、また読者がこの小説を読む時に付随する「フレーム」について検証した。まず、Hardy は「見る」ということは、見ている人の情緒的反応が入るため、見ている対象を客観的に認識し、定義できないとする。しかしながら登場人物たちは、見ている対象に自分の好み(=フレーム)を投射し、固定してしまう。また読者は、タイトルからこの小説がパストラル小説(=フレーム)であるとして、この小説の自然描写や登場人物たちを捉えようとする。この小説では、見るそして読む時、常に「フレーム」を通して対象は認識され、固定される。しかし Hardy は、このような認識の仕方には限界があり、常に対象には未知なる領域が存在するというを示している。

(司会 日本大学助手 堀切 大史)

「“Morality Play”としての「森の景色」

早稲田大学大学院 加藤 良浩

フラナリー・オコナーの短編「森の景色」は、祖父と孫娘が森の景色をめぐって対立し、暴力の果て、ついには死に至るという衝撃的な作品である。現実レベルの描写から評価した場合、この「森の景色」はこれまで必ずしも高い評価を受けてきたとは言いがたい。しかし、作者自身が述べているように、この作品を“morality play”として見た場合には、評価が異なってくるのではないか。“morality play”である限り、現実の描写としてよりも寓意を表す手段としての役割に重きが置かれることになるであろう。そして、この寓意表現から明らかになることは、一見些細で不合理に見える「神秘」を尊重する姿勢の重要性であり、さらにはその姿勢の軽視が自己の内部の崩壊につながるという見方、すなわち作者オコナーの言う「キリスト教的世界観」である。

(司会 早稲田大学非常勤講師 近藤 直樹)

第98回例会 (2004.6.13.)

「*The Mable Faun* の登場人物をめぐって」

昭和女子大学大学院 西山 里枝

ナサニエル・ホーソーンが、最後の長編『大理石の牧神』(*The Mable Faun*)において主要舞台として設定したのはヨーロッパでも最も古い都ローマであった。本発表では、作品とローマとの関連も踏まえながら、四人の登場人物を考察するとともに、ローマを舞台としたホーソーンの意図を探ることを目的とした。殊にドナテロとヒルダに重点をおき、精神的成長などにおける類似性や、死を契機に「無垢」から「経験」へと変貌する精神的成長について、ホーソーンが考える「幸運な墮落」の概念を絡めながら言及した。また、『大理石の牧神』は物語の核心が殺人事件にあることから、生と死の物語とも言え、生の幻像アルカディアに、反極の死の現実を配する両義性の意味を持つラテン語の成句“*Et in Arcadia Ego*”や墓碑が描かれているプッサンの絵を資料として検証を試みた。

(司会 日本大学助手 堀切 大史)

「Leigh Hunt's Liberal Poetics」

早稲田大学非常勤講師 藤原 雅子

コックニー詩派は、作品の道徳性と韻律法を保守系文芸雑誌から批判されたが、この2点はそのまま彼らの文学性を物語る。当発表ではコックニー派詩人ハントの『リミニ物語』における韻律法を、18世紀キャノンの代表であるポープのものと比較して分析した。ポープのカプレットは行末に必ず意味上の区切りが来るもので、統語的まとまりが意味的まとまりを示し、押韻が高度な言葉遊びを生む。ハントのカプレットはオープンカプレットと呼ばれる通り句またがりを持ち、押韻のねらいは意味的言葉遊びではなく、音楽的効果にある。ポープのカプレットが音・統語・意味を複雑に重ね、形式的に整っているのに対し、ハントはそのような構造を破壊し、詩語を「意味」の呪縛から解いた。封建的因習を暗に批判した作品でこのような言語的試みが行われたことは、ハントの社会改革志向、詩論をも考え合わせると重要な意味を持つ。政治への直接的言及が多いとは言えない『リミニ物語』が激しい批判を浴びた背景には、批評家と作家双方が文体に拘り、文体に政治的・文化的合意を見ていた当時の文学的状況があると考えられる。

(司会 日本女子体育大学専任講師 加賀 岳彦)

第99回例会 (2004.9.12.)

「McCullers の小説と劇をめぐって——*The Member of the Wedding*」

昭和女子大学大学院 廣田 純子

Carson McCullers は専門の劇作家ではないために劇のコンベンションに捕われずに自身の小説 *The Member of the Wedding* を劇に改作したといえる。本発表の目的は、彼女が原作小説に施した演劇的脚色を考察することである。原作小説と演劇の間における性格描写、風景描写、心理描写、筋や構成の相違点に注目した場合、Frankieの孤独をめぐる葛藤を劇の特性に活かしながら描写していることが指摘できる。さらに、一見間延びするとも思われる Berenice の長いセリフの中に、McCullers の錯綜した愛情に対する主張が浮かび上がっている点も指摘できる。

(司会 日本大学非常勤講師 中村 文紀)

第100回例会 (2004.12.12.)

「ロマン派とエコロジー」

日本大学芸術学部教授 植月 恵一郎

主としてジョナサン・ベイト『ロマン派のエコロジー——ワーズワスと環境保護の伝統』(小田友弥・石幡直樹訳、松柏社、2000年)の要約が中心となったが、その前に時代の文脈をまず確認した。

M.H.ニコルソンの『暗い山と栄光の山』(小黒和子訳、国書刊行会、1994年)で周知の様に、山に対する心性が、ルネサンスとロマン派の時代では「暗い」山から「栄光の」山へと大きく転換する。また例えば、キース・トマスの『人間と自然界——近代イギリスにおける自然観の変遷』(山内昶訳、法政大学出版局、1989年)で明らかのように、動物に対する態度がルネサンスとロマン派の時代では動物虐待から動物愛護へがらりと変化する。おりしも当時は、博物学関連書籍の売上げがディケンズの小説群に迫る勢いであり、博物学は「国を挙げての強迫観念」と呼ばれるほど自然への興味をそそった「博物学の黄金時代」(リン・バーバー『博物学の黄金時代』高山宏訳、国書刊行会、1995年参照)であったことも忘れてはならない。

以上のようにメンタリティが大きく変化する時代であったことを強調した上で、エコロジカルな概念の登場について主に『ロマン派のエコロジー』に沿って述べてみた。

自然詩人ワーズワスを再読して何になるのか、ただ新しい批評の流行に阿っただけではないのか、緑の文学批評をすれば必ずオゾン層の破壊が止むのかといった疑問ももつとだ。しかし今最も差し追った問題が、地球を消費し尽くそうとする「人間文明の結果を論じ矯正することである時に、『自然は存在しない』と言ってもなんの解決にもならない」(96頁)。

本来ベイトの意図はマガンの『ロマン派のイデオロギー』(1983年)批判にあった。ベイトは、あえて「イデオロギー」と言いたいのなら、『ドイツ・イデオロギー』をモデルにしたマガンの言うような抽象的ブルジョア的個人的観念的なものではなく、「ラスキンの『フォルス・クラヴィゲーラ』…に具体化された、エコシステムおよび疎外されない労働の理論」(28頁)をこそ「ロマン派のイデオロギー」と呼ぶべきであると主張する。

結局ベイトは従来の消極的な読み、つまり「社会や政治に対して直観的に『憤激している』若き急進主義者ワーズワスが、…保守的イデオロギーを標榜する反革命主義者…になるという図式」(41-42頁)であるとか、「ロマン派の「自然に帰れ」は、現実逃避の一形態」であり、「ワーズワスは恐怖政治の過酷な現実から逃れるために湖水地方に隠れ、ヴィクトリア時代のロマン派は自由放任の資本主義と汚れた工場を逃れて中世世界に入り込んだ」(90頁)といった見方に対する異議申立てを企てている。

「『抒情歌謡集』の方向は「センチメンタルからナイーブへ」であり、この詩集は全体として、読者を再び自然と結びつける様に作用している」(168頁)と『抒情歌謡集』の配列に言及したり、「イギリスの代表的エコロジストはラスキン」(99頁)であるとか、ラスキンは「1世紀ベイトソンに先んじていた」(136頁)とか、「現在活躍中の詩人で最もワーズワス的なシェイマス・ヒーニー」(142頁)といった見方も興味深い。

司会の加賀氏からの2000年(平成12年)10月1日の『毎日新聞』に富山太佳夫氏の書評が掲載されていたという指摘は有り難かった。

(司会 日本女子体育大学専任講師 加賀 岳彦)

「ミルトンの自然生態学(上)」

早稲田大学非常勤講師 大西 章夫

17世紀の英国では、自然科学の発達と科学技術の進歩とともに、自然を人間に都合良く作り変えて利用しようという「道具主義」が進展した。しかしミルトンの著作からは、こうした時代の趣勢とは相反する、自然界と被造物の長たる立場としての人間と自然との共生を説く思想的立場が読み取れる。近年のミルトン学界においても、エコロジーの観点からミルトンの自然観を再検討した「エコクリティシズム」が多々試みられている。当発表では、ミルトンの著作を伝統的に渉猟して彼の自然観を確認した。

ミルトン青年期の作品『快活の人』『沈思の人』においては、田園生活・都市生活・屋内での学究生活の描写が人間の成長過程と並置される。自然に囲まれた田園生活は青年期に位置づけられ、青年期には自然に目や耳を傾けその営みを受容することで人間として成長し、次の「都市」の段階へと進むことができるとミルトンは考えていた。老壮期には、17世紀においては天上との融合を意図し「天界」の象徴的機能を果たしていた音楽を用いて「天上」を表しながらも、窓外の自然とそのサウンドスケープを効果的に取り込むことで、「自然の段階」だった青年期という“初心”を忘れてはいけないことを示唆しつつ、人間の成長に能動的に関与する主体的な自然の姿をミルトンは描き込んだ。

こうした自然の主体性は、『失樂園』においても確認される。樂園の自然は、人間に対しても悪魔に対しても、その基本的立場からの逸脱を仕掛ける「誘惑者」として機能し、「第三世界」の立場を保つ。人間に対しては秩序からの逸脱を促し、悪魔に対しては“善への誘惑”を執拗に繰り返す樂園の自然が、正に天使ラファエルがアダムに論じた通り、「その役目を果たした」ことを当発表では確認した。

以上で今回の発表は終了し、樂園の自然の混乱が人間に及ぼす影響、及び『復樂園』における自然とイエスの関わりを、次回の発表課題として予告した。

(司会 日本女子体育大学専任講師 加賀 岳彦)

関西支部第13回例会 (2004.4.17. 於同志社今出川校地、以下同じ)

「女性に向けられた二つの教育——メアリ・ウルストンクラフトとシャーロット・ブロンテの主張から」

京都女子大学大学院 末森 恵子

18世紀イングランドに「良妻賢母教育」と「女性解放教育」という教育論が同時に存在したことは、『女性の権利の擁護』を著したメアリ・ウルストンクラフトの思想にさえ矛盾をもたらした。その後19世紀ではシャーロット・ブロンテの『ジェイン・エア』に、この両方の教育論の影響が見られる。二人の女性作家がそれぞれの教育論とどのように向き合ったかを考察するために、彼女らの著作を比較検討した。『ジェイン・エア』は、途中まではウルストンクラフトの小説『女性の虐待あるいはマライア』に見られるような女性の連帯の可能性を表し、結末はむしろ男性との関係の中に自立を見出す『女性の権利の擁護』に近いものを表しているといえることができる。よって『女性の権利の擁護』に共鳴する部分を持ちながら、『女性の虐待あるいはマライア』に見られる新たな展開の可能性を包含している作品として『ジェイン・エア』を仮定し、その論証を試みた。

(司会 同志社女子大学非常勤講師 江藤あさじ)

関西支部第14回例会 (2004.10.23.)

「モームの短編『九月姫』について」

関西大学非常勤講師 西紋 茂樹

『九月姫』はモームが一人娘ライザのために書きおろした童話的な小品で、結局、膨大なモームの短編小説にあって、最初で最後の童話風の作品になった。発表者はそこに作家モームと父親モームの、やさしい融合を見る。例会では、童話風でありつつ童話を超えたような、この作品のユニークさについて所見を述べた。

(司会 高野山大学特遇講師 藤井 晶宏)

2003 年

第93回例会 (2003.3.9. 於日本大学芸術学部江古田校舎)

「『リトル・ドリット』における視点の問題」

早稲田大学文学部助手 水野 隆之

『リトル・ドリット』は全知の視点から語られるが、それとともに複数の登場人物の視点からも語られる物語である。そして作中、登場人物の「見る」という行為が度々強調されている。では何故ディケンズは全知の視点だけでなく、他の人物の視点も導入したのか。それは、この小説は人物によって対立する視点がいくつも存在する中でそのどれが「正しい視点」なのかを模索する小説だからである。「正しい視点」とは何かという模索から登場人物の「見る」行為が強調され、それが小説の語りにも反映され、複数の登場人物の視点が用いられる結果になったのだ。それゆえ、複数の視点をを用いることは、ディケンズにとって必然であったのである。

(司会 早稲田大学非常勤講師 杉本 一郎)

第94回例会 (2003.6.8. 於日本大学文理学部、以下同じ)

「ジョイスの『出会い』について」

早稲田大学大学院 今井 宏二

『ダブリン市民』の二番目の短編「出会い」では、複数のテキストが言及されている。それは、授業で教師が少年が読むにふさわしいものを押しつける歴史書であり、それに対立する授業中回し読みされる少年向けの大衆雑誌である。授業中の優等生も放課後の遊びでは友人が暗黙に押しつける別の価値観(物語)を受け入れなければならない。また、少年が半日だけの逃避行中に会う不気味な男は少年を誘惑する策略として、教師的な語りを模倣しつつ幾人かの作家の名を挙げ自分が教養ある人間であることをほめかす。しかしこの男の語りはやがてサディズム文学を想起させるような倒錯的なものになってしまう。「“高級文化”を駆逐するものとしての“大衆文化”」という単純な図式を超え、むしろ双方の形式の類似を指摘しつつ、この二項の入れ替わりの連続あるいは溶融、そして脱コンテキストの語りこそが人を不安に陥れると同時に新たな世界観導入の端緒でもあるという観点から、この作品を扱ってみた。

(司会 日本大学非常勤講師 奥井 裕)

第95回例会 (2003.9.8.)

「ニューヨークで同時多発テロと大停電に遭遇して」

新見公立短期大学助教授 山内 圭

本発表日からちょうど1ヶ月前、2003年8月14日、私は学生の研修旅行の引率でニューヨークに滞在中、アメリカ・カナダ東海岸に発生した大停電を体験した。また2001年9月11日、姉妹都市訪問団の一員としてニューヨーク州ニューパルツヴィレッジを訪問後、帰国便に乗る寸前、ニューヨークのラ・ガーディア空港にて、同時多発テロに遭遇した。テロ遭遇については「ニューヨーク同時多発テロ遭遇記」として『ふおーちゅん』第13号にて報告済みだが、今回は大停電の遭遇と併せ、口頭により報告を行った。日本でも大きく報じられた両事件を現地で体験したことを、現地の新聞や資料をもとに報告した。

第96回例会 (2003.12.8.)

「殺す女・殺される女—— ヴィクトリア朝フィクションにおいて——」

日本大学文理学部専任講師 閑田 朋子

本発表は、ヴィクトリア朝前期から中期にかけての、フィクションにおける女性と殺人の関係について考察することを目的とした。まず、殺される女性(被害者として描かれる女性)について、次に殺す女性(加害者として描かれる女性)について、論じた。考察の対象としては、小説・ドラマを主に、その他には墓碑銘や新聞なども題材として、広い意味でのフィクション(「作り話」)を扱った。発表の焦点は、当時のジェンダー闘争を背景として、「家庭の天使」である「リスpekタブル」な淑女が、殺人に関わる場合、どのように描かれているか、という点に絞った。その際に、淑女(=家庭の天使)は、1)「家庭」の外、つまり殺人が可能な場に一人で出かけることがないために、殺されることは無い、2)「天使」としての善性を本質とするために、殺人を遂行することができない、という二つの家父長制的な社会神話が何年代のどの読者層から崩れていったのか、もしくはどの読者層では維持されていたのか、具体例をあげて考察を行った。

(司会 早稲田大学非常勤講師 杉本 一郎)

関西支部第11回例会 (2003.4.2. 於同志社大学今出川校舎、以下同じ)

「ミルトンの「混沌」」

同志社女子大学非常勤講師 江藤あさじ

ミルトンの『失樂園』には、セイタンの主観的描写が詳細に述べられ、しかもその描写にかなりの部分が割かれている。その悪魔の姿は、ミルトンの次の世代に大きな影響を与えただけでなく、今日に至っても、悪魔の系譜が語られる時、ミルトンの『失樂園』に拠るところが大きい。それほど影響力を持つミルトンのセイタン像は、ミルトンの真意を図ろうとするとき、読者の意見を二分してきた。セイタンは神より優れた英雄か? その理由の一つとして、作中において天と地獄が、その細部に渡って対照法で描かれていることが挙げられよう。本発表では、セイタンが闇の世界の「混沌」を自分の仲間として見なしたことが錯覚であり、また、セイタン同様に解釈した過去の研究者も錯覚に陥っていたと仮定し、その論証を試みた。

(司会 高野山大学特遇講師 藤井 晶宏)

関西支部第12回例会 (2003.9.20.)

「肉体美に対する執心とナルシズム」

同志社女子大学非常勤講師 井上 径子

生涯鏡(=他者)の目に映る自分を演じ続けたロレンスの短編小説“The Lovely Lady”の主人公ポーリンが、ついぞナルシズムを克服できずにいたこと、またその結果、彼女がいかに「愛する」能力を欠いていたかを、ラカンの「鏡像段階」に言及しつつ検証した。

(司会 同志社女子大学非常勤講師 江藤あさじ)

2002 年

第89回例会 (2002.3.10. 於日本大学芸術学部江古田校舎、以下同じ)

「「教え子」に見られるヘンリー・ジェイムズの金銭感覚」

早稲田大学大学院在学 大森 夕夏

ヘンリー・ジェイムズの小説の登場人物は、日々の生活の必要から解放されている上流階級であることが多いため、リアルではないという批判が、ジェイムズ自身の家庭環境と結びつけられて、ジェイムズ批評の初期の頃は盛んになされた。しかし、レオン・エデルがジェイムズの経済状況を詳細に調べ上げた伝記を1962年に出版してからは、ジェイムズ家の財産が誇張され過ぎていたことが判明し、ジェイムズの金銭感覚の鋭さが見直されるようになった。1891年に出版された「教え子」から、幼少期にジェイムズが感じたジェイムズ家の財政不安を窺うことができる。今回の発表では、金銭問題に巻き込まれた家庭教師の葛藤を中心に考察した。

(司会 早稲田大学文学部助手 村上 知子)

第90回例会 (2002.6.9.)

「動物と文学——アーヴィン・ウェルシュの奇抜な発想について」

日本大学非常勤講師 伊藤由起子

映画、漫画、写真、テレビなど、あらゆる視覚的な芸術・媒体に興味があり、作品にも独自の発想で視覚的な効果を駆使する作家アーヴィン・ウェルシュは、1995年の作品『フィルス』において「サナダムシ」を副主人公として登場させ、またその形をページの上に配置させるなどして読者を驚かせた。発表では、「サナダムシ」を「荘厳なる美の生物」、「純粋な魂を持つ生物」としているウェルシュの奇抜な発想と、なぜ「サナダムシ」なのかという理由を、第一にストーリー、第二にその生態から考察した。

(司会 千葉工業大学非常勤講師 小林 正弘)

第91回例会 (2002.9.8.)

「Flannery O'Connor の “Everything That Rises Must Converge” を読む」

早稲田大学大学院在学 加藤 良浩

Flannery O'Connor の短篇 “Everything That Rises Must Converge” は、南部の上流階級を祖先に持つチェストニー夫人と息子ジュリアンとの葛藤を描いた作品である。二人の葛藤は、チェストニー夫人が同じバスに乗り合わせた黒人女性から殴打されたショックで死亡することにより終わりを迎える。この母の死をめぐるのは、これまでその悲劇的側面に着目した議論がなされてきたが、本発表では、作品中の具体描写に着目することにより、母の死が悲劇的側面をもつ一方で、それが一種必然性を帯びた出来事であることを指摘した。つまり母の死は、母から息子への貴族的義務感 (noblesse oblige) の伝承としての役割を位置付けられており、この必然性によって示唆されることは、ジュリアンが自己欺瞞を自己犠牲に転化し、「罪と悲しみの世界」に進んで行く可能性であると思われる。

(司会 早稲田大学非常勤講師 杉本 一郎)

第92回例会 (2002.12.8.)

「『カタロニア讃歌』 試論」

早稲田大学大学院了 近藤 直樹

スペイン内戦に参加したジョージ・オーウェル(1903-1950)は、内戦について客観的に書くことの難しさを実感した。また、史実を人間の具体的な営みの集積ではなく、単に自陣の正統性を補強するための抽象的な事象と見なす人々に憤りを覚えた。彼が『カタロニア讃歌』(1938)で痛みや空腹感などの肉体的な描写を多用したのは、自身の経験が抽象的な事象として扱われるのを拒絶し、党派的な論争に回収できない生身の経験を記そうとしたからである。

(司会 早稲田大学非常勤講師 大石健太郎)

関西支部第9回例会 (2002.3.18. 於同志社大学今出川校舎、以下同じ)

「*Oliver Twist* におけるNancy 改心の意味」

甲南大学非常勤講師 吉田 一穂

『オリヴァー・ツイスト』(1837)のナンシーの人物描写は、平面的で現実味を欠いているオリヴァーの人物描写と比べ、高く評価されている。その理由として、彼女がヴィクトリア朝時代の犯罪者層との関わりにおいて現実には女性(売春婦)であることと、作品の中で唯一変化(改心)する女性であることが考えられる。女性が家庭を守る「家庭の天使」としての役割を期待されたヴィクトリア朝時代では、「転落した女」(fallen woman)は、理想的な女性像の対極に位置づけられた。「転落した女」の代表とも言うべきナンシーの人生は、全く無意味であったのだろうか？ 今回の発表では、ナンシーが人生において改心した意味を提示するとともに、ディケンズの「転落した女」救済の思想を探った。

(司会 同志社女子大学非常勤講師 江藤あさじ)

関西支部第10回例会 (2002.9.19.)

「怨霊鎮魂詩としての『リシダス』」

早稲田大学非常勤講師 大西 章夫

「悲嘆の真情の吐露がない」というサミュエル・ジョンソンの『リシダス』評は、多くのミルトン研究者の反発にあっている。しかし、「『リシダス』はミルトンの最も私的な詩であり、キングのことは口実である」とティリアードが指摘した通り、ミルトンは「真情」ではキングの事故死をそれほど悼んでなかったのではないかと？ ジョンソンの批評は彼の炯眼の証左ではないか？

『リシダス』が書かれた1637年には、母サラなど多くの近親者が亡くなり、ミルトンは「死」について、それも名声を得ず未熟なまま自分が死ぬことについて恐れ、思いを深くしていた。さらに、その優秀さにもかかわらず卒業後も聖職叙階の声はかからず、「研究のための隠棲」という美名ながら、ケンブリッジ在学時代の人脈から離れ孤立感に苛まれていた。久々にケンブリッジを訪ねてキング追悼詩集出版を聞き、末席ながら自詩の投稿を求められたミルトンは、「キング追悼」を看板としつつも、天賦の才能が未熟のまま夭折することへの不安、及び聖職の道から自分を締め出した国教会に対する呪いを、『リシ

ダス』において歌い上げた。しかし執筆直後に追悼の「真情」の吐露が感じられないことを周囲からも指摘されたミルトンは、「1645年詩集」の出版に際して、題名の直後に2行の注を挿入することで、キングを悼む「真情」が彼にこの詩を書かせたこと、及び1637年の段階で8年後の国教会凋落を予言していたこと、の2点についてアリバイ工作しようとした——この2点のうち、後者は既に他のミルトン研究者が「後づけの預言」として論証しているの、前者について、ケンブリッジ大学トリニティ学寮図書館に保存されているミルトンの手稿を精査した結果を視覚的に駆使して、今回の発表では論証した。

(司会 同志社女子大学非常勤講師 江藤あさじ)

2001年

第85回例会 (2001.3.11. 於日本大学芸術学部江古田校舎、以下同じ)

〈読書会〉

「CS について——上野俊也／毛利嘉孝『カルチュラル・スタディーズ入門』筑摩書房、2000年、ちくま新書261を中心に——」

主宰 日本大学芸術学部助教授 植月恵一郎

今回は研究発表ではなく、一つのテーマ = cultural studies (以下CS)を取り上げ、一冊の本 = 『カルチュラル・スタディーズ入門』(ちくま新書)の読書会という形で例会を行った。

アメリカでの CS のメッカでもあるジョージ・メイソン大学(GMU)が設けた CS の博士課程の説明によると、CS とは「文化的なモノの生産・流通・消費を社会的な文脈の中で検討するために、解釈と説明の手法を接合しつつ、社会科学と人文諸学を結びつける」ものだというプログラムは、社会科学と人文諸学とを結びつける「理論や方法に特に焦点を当てながら」、「国民性、階級、人種、ジェンダーといった今日の問題」をはじめ、「過去、現在のあらゆる形態の文化」を取り扱う、と説明されている。さらに続く解説では、CS が、思想的には、批評理論、解釈学、現象学、ポスト構造主義、その他諸々の潮流の影響を受けていることが説明され、さらに、CS が、グローバル化による社会の流動化や、産業社会から情報社会への移行に伴う文化的な意味での財の生産・消費の拡張、といった事態を受けて出現したことが説かれている。

このような特徴をもった学問の手法が、文学にも有効か、また現代だけでなく古い時代にも有効であるかなどの疑問が出たが、文学研究は、社会科学と人文科学の両方にまたがっているし、現代は近代から連綿とつながって展開していると考えれば、ルネサンス以降の諸問題にもじゅうぶん有効であることを確認して読書会を終えた。

第86回例会 (2001.6.10.)

「ヴィクトリア朝社会問題小説における問題点」

日本大学文理学部助手 閑田 朋子

イギリス文学における「社会問題小説」は、狭義には「加速する産業化によって生じた当時の大きな社会問題を主題とする1840年代および1850年代に書かれた小説」として定義され、具体的には *Sybil*、*Mary Barton*、*North and South*、*Hard Times* などがあげ

られることが多い。本発表では、この定義の問題として、第一に 1840 年代及び 1850 年代という期間設定が適当ではないことを指摘した。産業革命は 18 世紀後半に始まり、1840年代以前にも大きな社会問題を生じ、それらを主題とする多くの文学が 1840 年代以前に書かれている。第二に具体例としてあげられる作品がミドルクラスの作者による労働者に同情的な作品に偏っていることを指摘した。次に、なぜこのような二つの問題が生じるに至ったのかを、第一次世界大戦後の批評、とくに *Scrutiny* からマルクス主義文学批評の流れの中から考察した。

(司会 早稲田大学文学部助手 水野 隆之)

第87回例会 (2001.9.9.)

「英詩と声楽曲」—— その活用の可能性と鑑賞」

早稲田大学非常勤講師 小林 英美

本発表は声楽曲にされた英詩を紹介し、英詩がいかに関係されて曲をつけられたかを考えながら、英文学の教育現場で活用できる可能性を提示しようとするものである。作品紹介には CD を利用し、作品によっては楽譜も配布した。

発表は二部構成で、前半では英文学史を声楽曲で追った。具体的にはチャプマンの『カンタベリー物語』からウルフの日記まで、古今の英国作曲家による作品を紹介した。後半はジョン・キーツの「つれなき美女」とウィリアム・ブレイクの「虎」と「子羊」のそれぞれについて、異なる作曲家による声楽曲を取り上げ、作品解釈の相違を比較検討した。なお今回紹介したものは、発表者のコレクションの一部であり、現在そのデータベース化をすすめている。

(司会 日本大学非常勤講師 藤原 雅子)

第88回例会 (2001.12.9.)

「『ブラックウッズ・エディンバラ・マガジン』とリー・ハント—— 『リミニ物語』における問題点」

日本大学非常勤講師 藤原 雅子

リー・ハントの『リミニ物語』(1816) は、『ブラックウッズ・エディンバラ・マガジン』の連載記事「コックニー詩派について」の中で激しい批判を受け、主人公が義理の弟と不倫に陥る物語のモラルと詩的技法の2つが問題となった。従来ハントと同誌の関係は、もっぱらリベラル派詩人と超保守派雑誌のイデオロギー的対立として語られてきたが、当発表では、ハントの文学性にも批判が起因している可能性を指摘した。詩行の大半を占める華麗な行列描写と過剰な表現、あずまやのモチーフなどを見る限り、この物語は詩人自身が述べているような「封建社会の批判」というよりはむしろ、彼の中世ロマンスへの耽溺ぶりを浮き彫りにしている。当時保守派の文芸雑誌は英国固有の文化や歴史を描くことを評価し始めており、ノスタルジックな、そしてモラルや歴史的認識に欠けた宮廷恋愛の物語は、ただ読者の情感に訴えるだけの不健全なものとして映り、批判の対象となったのではないかと考えられる。

(司会 早稲田大学非常勤講師 加賀 岳彦)

「オーウェルとビルマの日々」

日本大学非常勤講師 奥井 裕

オーウェルは1922年、19歳の時に英領インド帝国の警察官としてビルマ(現ミャンマー)に着任し、1927年の夏まで当地に滞在する。そして職務を遂行する中で帝国主義の弊害を思い知ることになった。今回の発表では、「絞首刑」『ビルマの日々』「象を撃つ」といった初期の代表作を軸に、この時の体験が彼に及ぼした影響について述べ、彼の文学的テーマの原点の多くが彼のビルマ時代にあることを明らかにした。

(司会 早稲田大学文学部助手 水野 隆之)

関西支部第7回 (2001.3.19. 於同志社同窓会館、以下同じ)

「D.H. Lawrence の “The Lovely Lady” を読む」

同志社女子大学非常勤講師 井上 径子

D.H. Lawrence の晩年の短編小説 “The Lovely Lady” には、エゴイズムに囚われた一人の女性の晩年の生き様が克明に描かれている。この女性は72歳という老齢にあるにも拘らず、類い稀な肉体的若さと美貌 “loveliness” を湛えて登場するが、ある日を境に恐るべき変貌を遂げた彼女は、結末ではこの上ない老醜女と化している。一体、それまで彼女の肉体的若さと美貌を保持させていたものとは何であったのかについて掘り下げた時、そこには、底知れない彼女のエゴの欲望と、誉れを得る武器ともなる美貌を保持しようとする彼女の意志の力との連関が見えてくる。この女性がどこまでも「意志の力」に頼まなければならなかったことの背後には、彼女には本質的な「自己」が欠如していたという事実があった。

(司会 同志社女子大学非常勤講師 江藤あさじ)

関西支部第8回 (2001.9.14.)

「*The Mystery of Edwin Drood* から *Our Mutual Friend* 」

高野山大学特遇講師 藤井 晶宏

ディケンズの最晩年の二つの作品『我らが共通の友』と『エドウィン・ドルードの謎』には、それぞれよく似た排他的な愛国者が登場する。彼等を中心に、それらが書かれた順序とは逆に、『エドウィン・ドルードの謎』から『我らが共通の友』を見ることで、見えてくるものがある。それは、英国を脅かす「鉄道」の存在の欠如である。

『エドウィン・ドルードの謎』において、外部から異質なものをもたらした「鉄道」は、その前の作品『我らが共通の友』ではまだ描かれず、代わりに描かれているのが、「海」や「水」であり、それらはむしろ遍在し、外部を持たず、同質な世界を拡大するのに貢献しているにすぎない。同時に、この二作品を見ることで、「海」を支配し世界を拡大した英国が、そのことによってかえって外部の侵入に脅かされるという「歴史の流れ」も見えてくることを論証しようとした。

(司会 同志社女子大学非常勤講師 井上 径子)

2000年

第80回例会 (2000.3.12. 於日本大学芸術学部江古田校舎、以下同じ)

「John Steinbeck と R.L. Stevenson」

新見公立短期大学専任講師 山内 圭

ジョン・スタインベックは1941年8月、『ハーパース』第183号に短編小説「イーディス・マッギルカディはどのようにしてR・L・スティーヴンソンに会ったか」を発表した。この短編は短編集『長い盆地』に収録するつもりで書かれたものであるが、結局同短編集への収録は見送られ、現在では必ずしも多くの読者に読まれているとは言えない。本発表では、まずこの短編のあらすじを紹介した。タイトルにもあらわれているのだが、本作品にはR・L・スティーヴンソンが登場する。そこから作家スティーヴンソンとスタインベックの関わりについて考察した。

(司会 早稲田大学文学部助手 加賀 岳彦)

第81回例会 (2000.6.11.)

「Mrs. Dalloway における Lady Bruton をめぐるテキスト戦略」

十文字学園女子大学非常勤講師 榑原理枝子

ヴァージニア・ウルフが属していたブルームズベリー・グループのメンバー間で反戦・平和主義が支持されていたということを、グループのメンバーであった彼女の夫レオナルドの自伝や、彼女の甥クウェンティン・ベルの著作から見たうえで、『三ギニー』に見られるウルフの平和主義に言及し、『ダロウェイ夫人』に登場する好戦的な帝国主義者レディ・ブルートンの表象を、ウルフのテキストにひろく見られるレズビアニズムの特権化を視野に入れつつ、レズビアニ的思慕をめぐっていかなるテキスト戦略が張りめぐらされているかという点に注目して論じた。

(司会 日本大学非常勤講師 奥井 裕)

第82回例会 (2000.9.10.)

「1795年時点における S.T.コウルリッジの神学とウィリアム・ペイリーとの関連について」

早稲田大学大学院 直原 典子

コウルリッジが1795年の「啓示宗教に関する講演」において述べた宗教思想と、当時のイギリス国教会左派の理論的中心人物というべきウィリアム・ペイリーの思想との比較を行い、二人の共通点ならびに相違点を明らかにした。

(司会 早稲田大学非常勤講師 小林 英美)

第83回例会 (2000.11.12.)

「トマス・カーライルの「黒奴問題」について」

早稲田大学文学部専任講師 岡田俊之輔

Thomas Carlyle の ‘The Nigger Question’ は、その題名共々、黒人に對する差別的な文書であるとして屢々弾劾される。近年、所謂ポスト・コロニアル批評の流行により、その傾向は益々強まるばかりである。けれどもカーライルの眞の狙ひは、黒人を差別する事では無論なく、國民同胞が置かれてゐる政治的・經濟的・文化的慘状には目を向けず、遙か遠い西印度の黒人解放などに現を抜かず偽善的な博愛主義者たちを斬る事、更には安直なる民主主義禮讚の風潮に對して警告を發する事にあつた。カーライルの、延いては當時の「大英帝國」臣民の、意識されざる差別意識を抉り出す研究も強ち無意味ではないが、さりとして、その段階に止まつてゐるばかりでは餘りにも不毛な議論と言はざるを得ない。それゆゑ今回の發表は、昨今の批評の潮流に敢へて逆行するやうな内容とし、作者の言説の眞意とその意義とに重點を置いて論じた。

(司会 早稲田大学非常勤講師 池田 史彦)

第84回例会 (2000.12.10.)

「講読は非実用的か？」

日本大学非常勤講師 奥井 裕

近年、英語の國際共通語としての役割が大きくなり、それに対応する形で、日本でも英語教育の改革が進んでいる。中学・高校・大学と長年にわたって英語を学習しても、実用面で生かせない現状に対する批判も強く、日常生活や実務面でのコミュニケーションを重視した英語教育の必要性が叫ばれている。そのような世情の中で、大学の英語教育の中心的役割を果たしてきた教養英語(講読)は衰退している。とりわけ文学作品や本格的な評論は片隅に追いやられ、これらの使用を禁止する大学(学部・学科)も現れた。しかし、文学作品や本格的な評論を「実用面で役に立たない」という理由で教室から締め出すのは大きな誤りだと思う。今回の發表では、教養英語(とりわけ文学作品や評論の講読)の実用的効果と意義について考察し、その再評価を試みた。

(司会 日本大学非常勤講師 藤原 雅子)

関西支部第5回 (2000.3.31. 於同志社大学今出校舎、以下同じ)

「柔らかい都市の可能性：60年代後半から70年代初めの空気構造流行の文化的背景」

同志社大学専任講師 遠藤 徹

60年代後半から70年代初めにかけて一時的に世界的なブームとなった、空気構造建築や家具は、對抗文化運動や、建築・デザイン界の革新運動、環境問題への意識など、様々な文化的背景のもとで起こった出来事であった。それは従来の重く、動くことのない、それゆゑに権力の象徴となった建築物に對し、プラスチックの皮膜で空気を包んだものという軽く、可動的で、ノマド的な新しい文化の可能性を感じさせるものとして歓迎されたのであった。そうした事情を、具体例に即して語って見たのが本發表の内容である。

(司会 同志社女子大学非常勤講師 江藤あさじ)

関西支部第6回 (2000.9.18.)

「善でないものは即ち悪か—— *Paradise Lost* に映し出されたプラトンの影響——」

同志社女子大学非常勤講師 江藤あさじ

アイデアを失ったダイモーンが、その曇った日で唯一見ることのできるものが「美」であり、人は愛の主体者として他者の中に「美」を見出し、それを愛することによって「善」を高めることができる、というのがプラトンの理論である。「愛」が「善」に向くか否か。それは他者に対して天上的愛を抱けるか、それとも地上的エロースに身を任せるに留まるかによる。つまり、ダイモーンは完全な「善」と完全な「悪」の間を自由に往来することのできる存在ということになる。

ミルトンのアダム、イーヴ、セイタンも、まさにこの状態にあるのではないか。セイタンは天使でありながら神に背き、その直後、彼から生まれた娘「罪」と地上的愛に耽る。アダムとイーヴは、神の定めを破ることで相手に真の「美」を見出すことができなくなり、その結果地上的愛に身を任せるようになる。しかし、これら天上的愛を忘れし者にもかつての美德の名残りが宿っているとミルトンは説く。つまり彼らもダイモーン同様、「善」と「悪」の間を往来できる存在ということになる。本発表では、善と悪との間を移動する彼らの「美」の変貌を中心に、墮落後の彼らが未だ完全な「悪」に陥ってはいない存在であることの立証を試みた。

(司会 高野山大学特遇講師 藤井 晶宏)

1999 年

第73回例会 (1999.3.14. 於日本大学芸術学部江古田校舎、以下同じ)

「ジョージ・ハーバートにおける ‘cunning’ の真意」

日本大学非常勤講師 石黒 恭代

本誌前号(第9号)の拙論「ジョージ・ハーバートにおける罪の不安—— ‘one cunning bosome-sinne’ の一考察——」で、ハーバートの罪の意識が ‘one cunning bosome-sinne’ という印象的なフレーズに象徴的に表れていることを例証した。今回は、更に ‘cunning’ に焦点を当て、シェイクスピアや、ジョン・ダンなど他の形而上詩人たちとの比較検討を試みた。その結果、ほとんどの詩人が、当時の一般的用法である“巧妙な”という意味でこの語を使っており、一方、“ずるい” “老獪な” という否定的な意味が込められたハーバートの使い方は、当時としてはむしろ珍しいものと分かった。この点から、ハーバートの「罪の意識」の特殊性を考察した。

(司会 中央大学非常勤講師 横山 孝一)

第74回例会 (1999.4.11.)

「自己愛と自己滅却—— アン・ブラッドストリートの“若気の至り”」

横浜国立大学非常勤講師 大西 章夫

父も夫もマサチューセッツ湾岸植民地総督だったブラッドストリートは、17世紀アメリカにおいて女性解放を主唱した先駆者として、同時代のアン・ハッチソンなどと並んで言及され、フェミニズムからのアプローチが近年盛んである。しかし、もしブラッドストリートが自詩の中で男性社会批判を展開していたとしたら、アン・ハッチソンを追放した当時の社会支配階層が、いくら総督の娘だからといって、そうした女性を野放しにしてお

くだろうか。本発表では、彼女の生きた時代の背景と主潮を検討し、彼女の詩は男性社会を受容しつつ女性の美点をも正当に評価してほしいという「お願い」のレベルにすぎないと結論し、合わせて17世紀の社会・思想を20世紀のモノサシで測る傾向をもつ昨今の批評理論に警鐘を鳴らした。

(司会 日本大学芸術学部助教授 植月恵一郎)

第75回例会 (1999.6.13.)

「二つの『ハイピリオン』—— 古代弁論術を解法として」

拓殖大学非常勤講師 小林 正弘

キーツの二つの『ハイピリオン』を比較検討しようというテーマは、もはや陳腐なものかもしれない。にもかかわらず、敢えてこのテーマの再吟味に挑んだ理由は、第一に、今までのところ少なくとも邦人研究者にとっては盲点になっていると思われる視点を提出したかったこと、第二に、その視点を掘り下げることによって、従来の比較検討には欠けていると思われる新たな解釈の可能性を示唆したかったこと、この二つである。その視点とは、E.R.クルツィウスが提唱する、現代に至るまでの全ヨーロッパ文学に通底する弁論術である。

(司会 学習院大学非常勤講師 小林 英美)

第76回例会 (1999.7.11.)

「青年ワーズワスの記念碑としての「イチイの木」—— 詩集での作品配置と思想的影響との関係」

学習院大学非常勤講師 小林 英美

『リリカル・バラッド』(以下LB)初版において、ワーズワスの作品としては第1番目に選ばれた「エスウェイト湖付近のイチイの木の下の腰掛けの詩」の配置意義を究明しようとする考察。まずこの詩の評価が仲間の中で高かったことを示した上で、その人気以外の原因を求めて、LB 第2版等での第1番目の作品の諸特徴を考察した。次にこの作品がゴッドウィンの思想とコウルリッジの思想の過渡的性格を有することを確認し、その思想の境界的性格が大きな決定要因になったことを明らかにした。

(司会 日本大学非常勤講師 藤原 雅子)

第77回例会 (1999.9.12.)

「二つの夫婦の形——シリトーの結婚観について」

日本大学非常勤講師 横田由起子

個人の結婚観とは、自分の両親の夫婦像と自分が結婚して築き上げている現在進行形の夫婦関係が最も大きな柱となっているのではないだろうか。シリトーの場合、両親とは全く異なる結婚をした。このことは、処女作出版から1963年までの作品と、1965年から1970年の作品に表れる夫婦の形に大きな隔りがあることと大いに関係があると考えられる。発表では、二つの時期に表れる夫婦像を比較し、変化の原因を探り、英国での評価に触れた。シリトーは、果たして現在進行形の夫婦像を描くことにくつろぎを感じているのだろうか、そして彼にとって過去とはどんな意味を持っているのか、を具体的に作品から引用しながら明らかにした。

(司会 早稲田大学文学部助手 田村 裕二)

第78回例会 (1999.11.14.)

「『サムラー氏の惑星』における1960年代の表象——黒人とユダヤ人を中心に」

日本大学非常勤講師 新宅 美樹

『サムラー氏の惑星』は、物質文明に対する警鐘、ユダヤ的自己の探究、ホロコーストについて言及したテキストなど様々な解釈が可能な作品である。今回の発表では、公民権運動を中心にユダヤ人と黒人の複雑な歴史に焦点を絞ってこのテキストを解説し、「黒人スリ」の曖昧性(空白)について論じた。

(司会 日本大学非常勤講師 奥井 裕)

第79回例会 (1999.12.12.)

「『ハード・タイムズ』—— 事実に基づいた空想—— 」

早稲田大学大学院 水野 隆之

ディケンズの『ハード・タイムズ』には、「事実」と「空想」の対立が描かれている。「事実」に対する「空想」の勝利、これがこの小説になされる一般的な解釈である。しかしディケンズは『ハード・タイムズ』の中で、「事実」に支配された世界を批判し、「空想」の必要性を訴えはしたが、「事実」そのものを完全に否定したわけではなかった。というのも、彼の考えでは「事実」と「空想」は対立するものではなく、相関するものであったはずだからだ。そしてそれは「事実」に基づく「空想」ということになる。今回の発表では、「事実」と「空想」の関係がディケンズの作家としての信念にも関わる問題であったことを明らかにして、『ハード・タイムズ』での「事実」と「空想」の関係を捉え直す試みをした。

(司会 日本大学非常勤講師 横田由起子)

関西支部第3回例会 (1999.4.11. 於同志社大学今出川校舎、以下同じ)

「放送通訳について」

近畿大学非常勤講師 小倉 慶郎

日本は世界一の翻訳大国と言われるが、放送通訳でも世界一であることは間違いない。NHK-BS では、英語をはじめとして、フランス・ドイツ・ロシア・スペイン・中国・韓国・ベトナムの8ヶ国語の定時のニュースが、日本語の通訳付きで、平日には連日流れている。毎日使用する通訳者 50 人前後にも及ぶという。また BS のほか、CS でも CNN International、BBC World、Fox Newsなどで、英語と日本語の二か国語放送が毎日流れている。まさに日本は放送通訳の百花繚乱状態である。

ヨーロッパでは、放送通訳 (media interpreting) と言えばほぼ同時通訳のことを指し、大統領選など重要なニュースの時にのみしか使われない。一方、NHK-BS では海外ニュースを「時差通訳」という形式を使って処理しているが、定時のニュースの「時差通訳」は恐らく日本独特のものである。

時差通訳者は、通訳者・翻訳者・編集者・アナウンサーの役割を兼ね、NHK 放送通訳

の中心的存在となっている。ニュースの速報性と正確さの追求の末に生まれたのが「時差通訳」である。発表では NHK-BS の時差通訳に焦点を当て、時差通訳とは何か、その通訳プロセス、独特の決まりなどを、事例をもとに紹介した。

(司会 同志社女子大学非常勤講師 江藤あさじ)

関西支部第4回例会 (1999.8.11.)

「サマセット・モームの短編『蟻とキリギリス』について」

関西大学非常勤講師 西紋 茂樹

モームの短編『蟻とキリギリス』には、論点のずれた批評が多い。作品の真のテーマは何か？ 発表では通説の誤りを指摘し、私の所見を述べ、加えて今なぜ物語なのかを問い直した。

(司会 同志社女子大学非常勤講師 江藤あさじ)

1998 年

第66回例会 (1998.3.8. 於早稲田大学総合学術情報センター)

「リチャード・クラショーの〈心臓〉——「燃える心臓」について」

日本大学助教授 植月恵一郎

クラショーはアヴィラの聖テレサを称賛する詩を3篇書いている。「燃える心臓」はその一つである。その冒頭で触れられている聖テレサの肖像画の構図を再構築しながら、聖テレサと熾天使の関係、「矢に貫かれた〈心臓〉」、「〈心臓〉貫通」の意味などについてまず考察した。

さらに、当時大陸で流行したと言われる「聖テレサ・カルト」、及びさらに大きな文脈である「反宗教改革」にも目を配った。

何よりも手がかりになるのは、聖テレサの図像と〈燃える心臓〉のエンブレムであった。〈燃える心臓〉の意味を際立たせるために〈燃えない心臓〉についても言及しておいた。つまり、シェイクスピアの〈心臓〉、ダンの〈心臓〉、ハーバートの〈心臓〉についてである。

〈火炎〉のシンボリズムは、結局煉獄の〈火炎〉であり、カトリックに固有のものであった。それはさらに〈赤〉のシンボリズムにつながり、〈血液〉を連想させ、当時最先端の科学であったハーヴィーの『血液循環論』へとつながる。

本発表の内容は、「クラショーとテレサ——「燃える心臓」について」(植月恵一郎編『〈男〉と〈女〉のディスカール——シェイクスピアからドライデンまで——』金星堂、平成10年12月、179-202 頁)に結実した。

(司会 日本学術振興会特別研究員 大西 章夫)

第67回例会 (1998.4.12. 於 日本大学芸術学部江古田校舎、以下同じ)

「グリーブ家のバーバラ」

早稲田大学大学院 杉山 幸子

ハーディの短編「グリーブ家のバーバラ」は、身分違いの恋人と駆け落ちするという、最初に社会的な掟を破った貴族の娘バーバラのその後の運命を描いている。発表では、際立って陰惨な結末に向けて物語に転換をもたらす二場面を取り上げ、考察を試みた。

(司会 早稲田大学大学院修了 木ノ内敏久)

第68回例会 (1998.6.14.)

「オーウェルは矛盾の多い作家か」

日本大学非常勤講師 奥井 裕

オーウェルは、矛盾の多い作家であると言われているし、彼の著作の中に矛盾を感じさせるような記述があるのは事実である。しかし、他方これをオーウェルの矛盾と言ってよいのだろうかと思うような論調も少なくない。発表では、オーウェルの矛盾と言われているもの全てを検証するのは不可能なので、代表的な例としてまず初めに英独戦争(第二次世界大戦)の開戦前と開戦後のオーウェルの態度の変化について取り上げ、次に、ある意味では急進的な社会主義者のオーウェルが、なぜ保守的で愛国主義的でもあり得たのかということについて述べ、併せてオーウェルの文学の一貫性についても言及した。

(司会 千葉工業大学非常勤講師 横田由起子)

第69回例会 (1998.7.12.)

「労働者階級の音表現」

千葉工業大学非常勤講師 横田由起子

アーヴィン・ウェルシュとアラン・シリトーは、どちらも労働者階級出身の作家である。この一点から、二人は比較されることが多い。発表では、二人の作家の音表現にしぼって作品の比較を試みた。視覚的な印象、文や章の長さ、空白のとり方、話法の転換の方法においてかなりの違いが見られた。それらの違いを踏まえて、それぞれの作家の独自性を明らかにした。

(司会 早稲田大学文学部助手 加賀 岳彦)

第70回例会 (1998.9.13.)

「『ダロウェイ夫人』における帝国主義と権力構造」

早稲田大学大学院修了 榊原理枝子

世紀転換期から第一次世界大戦後にかけてのイギリス帝国主義が、1925年に発表されたヴァージニア・ウルフによる『ダロウェイ夫人』にいかなる痕跡をとどめているのか、という関心からの読解を試みた。大戦終結後5年ほど経ったロンドンで、社交好きのダロウェイ夫人がパーティーを開くという平凡な一日を描いた『ダロウェイ夫人』のテキストに潜む政治性に、当時のイデオロギーにおける支配への欲望という観点から迫った。

(司会 成城大学大学院 市川 雅一)

第71回例会 (1998.11.8.)

「コウルリッジの言語論」

早稲田大学文学部助手 加賀 岳彦

コウルリッジはいわゆる言語論なるまとまった著書は書かなかったが、彼の残した膨大な著作・書簡の中には、言語に対するすぐれた考察が数多く見られる。特に興味深いのは、18世紀後半からの「言語起源論」に由来する有機的・歴史的言語観(つまりロマン派)の圧倒的な影響下にありながら、それだけにとどまらず20世紀の意味論や記号論を予見するような考察まで提起していることである。今回の発表では、コウルリッジが考えた言語の有機体説、「混成語」としての英語の問題、言葉の意味の問題を通して、ヨーロッパの言語学が philology から linguistic なものへと移行していく巨大な動きを体言しているコウルリッジの言語思想を報告した。

(司会 早稲田大学教育学部助手 藤原 雅子)

第72回例会 (1998.12.13.)

「キーツと文芸ジャーナリズム—— *Endymion* 序文改稿をめぐって」

早稲田大学教育学部助手 藤原 雅子

キーツは『エンディミオン』出版に先立ち序文を書いたが、友人や出版社の反対にあい、書き直しを強いられた。ジャーナリズムへの敵意を剥き出しにした初稿に比べ、書き直された第二稿はかなりトーンダウンしており、自らの作品の未熟さを謙虚に認めたものとなっている。特定の雑誌を名指しして挑発するような言葉も削除された。

発表では、序文が当時の文芸ジャーナリズムを意識して書き直された可能性を指摘した。当時保守派の文芸雑誌による、リー・ハントらリベラル派文人への攻撃が始まっており、ハントの「弟子」とみなされたキーツも、第一詩集に否定的な評価が寄せられるなど影響を被っていた。書簡、文芸雑誌の記事などを読むかぎり、キーツたちは、自分たちがリベラル派の中心人物ハントに距離をおいていることを印象づけ、保守派文芸雑誌からの攻撃を和らげるべく、序文を書き直したと考えられる。

(司会 拓殖大学非常勤講師 小林 正弘)

関西支部第1回例会 (1998.5.22. 於同志社女子大学同窓会館)

「ミルトンの庭——隠れ家としてのミルトンの森」

日本学術振興会特別研究員 大西 章夫

『失樂園』に描かれるミルトンのエデンの園について、「森」としての観点から分析し、初期の仮面劇『コウマス』やスペンサーの『妖精女王』に登場する「アドニス庭」との比較や影響関係の分析を経て、隠れ家、教育的要素を含む試練の場といった森本来の機能をミルトンがどのように『失樂園』の中に取り入れていったか論及した。

(司会 同志社女子大学非常勤講師 江藤あさじ)

関西支部第2回例会（1998.5.22. 於同志社大学今出川校舎）

「Canonical Marking Relation と Optionality」

同志社女子大学非常勤講師 城下真由美
（司会 同志社女子大学非常勤講師 江藤あさじ）

1997年

第59回例会（1997.3.9. 於早稲田大学国際会議場、以下同じ）

「J・D・サリンジャーの謎を解く——失恋体験とその影響——」

中央大学非常勤講師 横山 孝一

『ライ麦畑でつかまえて』で有名なサリンジャーは、1965年の「ハプワース 16、1924」を最後に沈黙してしまう。マスコミを徹底的に避け、現在では生きた伝説と化した。一体、「謎の作家」に何が起こったのか。発表では、ウーナ・オニール(チャーリー・チャップリンの妻となった女性)に失恋した過去に注目し、その傷跡を各作品に見出した。そして、最後の作品を書く前年にチャップリンが『自伝』を出版している意義にも言及した。

（司会 中央大学非常勤講師 小松 良江）

「R・L・スティーブンスン『マーカイト』の訪問者(Visitor)の正体について」

目白学園高校教諭 竹内 一郎

マーカイトは叔父の収集している骨董品を盗み出しては、馴染みの店に売却し金を手に入れるという生活を送っていた。しかしその生活にも限界がきた。株で大損してしまったのだ。クリスマスの日、彼は骨董品屋にやってきてその主人を殺害、金を奪って逃げようとした。そこに正体不明の訪問者(Visitor)が現れる。彼と訪問者は対話を続けていく。その訪問者の正体は一体誰か？ 何の目的でその場にやってきたのか？ マーカイトとの対話により、その点を考察する。

（司会 早稲田大学大学院 杉本 一郎）

第60回例会（1997.4.13.）

「C・S・ルイスとミルトン——『失樂園序説』を中心に——」

早稲田大学大学院 池田 史彦

かつて T・S・エリオットはミルトンを偉大な詩人として評価する一方、個人的な反感を表明したが、その要旨はこうである。詩人は抽象的な詩的言説を生み出す以前に、生活に根差した生ける体験に通じている必要があり、読み手の人生が豊かに実ることを願って創作しなければならぬ。然るにミルトンの詩的言説は余りにも観念的であり、読み手を裨益することがない。一方、C・S・ルイスは次のように主張する。ミルトンの詩を読む者は、魂を揺さぶられるような宗教的体験を味わうのだ。果たしていずれの論に与すべきであろうか。それは個々の読み手に委ねられている。

（司会 日本学術振興会特別研究員 大西 章夫）

第61回例会 (1997.6.8.)

「F. Scott Fitzgerald の *The Beautiful and Damned* を読む」

早稲田大学非常勤講師 深谷 素子

フィッツジェラルドは俗物だったとの事実を出発点とし、その俗物性が *The Beautiful and Damned* に与えた影響を探る。この作品は感傷的な風俗小説との評価が定着している。しかし、1910年代から1920年代という時代の社会学的な意味を重ねてみることで、そこに描かれた俗物たちの不毛な生活を、当時のアメリカ消費社会に呑み込まれて生きる人間の寓話として読むことが可能になる。フィッツジェラルドは、自らが俗物だったからこそ実感できた消費の甘い誘惑と果てしない空しさを生々しく写し取ることで、現代にも通じる消費社会の寓話を生んだのである。

(司会 千葉工業大学非常勤講師 横田由起子)

第62回例会 (1997.7.13.)

「シャーロット・ブロンテの『ヴィレット』 (*Villette*) について」

早稲田大学大学院 田村 裕二

『ヴィレット』という作品は、『教授』や『ジェイン・エア』同様、一人称の「私」が自らの半生を回顧して綴った自伝、という体裁を採っているが、自己韜晦ぶりが目立つルーシー・スノウという人物を語り手兼主人公に据えている点では、前二作と決定的に異なっている。本発表では、ルーシーの屈折した語り口、彼女が多用する受動態動詞、あるいは「修道女の亡霊」の意味等に言及しながら、この人物が持つ特異性を浮き彫りにする。

(司会 早稲田大学文学部助手 杉本 一郎)

第63回例会 (1997.9.14.)

「George Herbert における罪の意識の一考察」

創価大学大学院修了 石黒 恭代

ハーバートの詩集を一度でも読んだ者ならば、そこに詩人の神への愛を切願するベクトルと、自らの罪の意識に悩み、その苦悩をあからさまに表白するハーバートの姿が見てとれることは言うまでもない。サマーズ等が言う「高慢の罪」‘self centered pride’ という解釈がその苦悩のこれまでの代表的な解答であったように思われる。今回の研究発表ではその解釈をベースにしながらも、更に一步踏み込んで、自己中心的な高慢の罪という解釈ではとてもとらえきれないハーバートの罪と苦悩の実体を明らかにしていきたい。

(司会 日本大学芸術学部助教授 植月恵一郎)

第64回例会 (1997.11.9.)

口頭研究発表なし。

第65回例会 (1997.12.14. 於早稲田大学総合学術情報センター)

「コミュニケーションと間主観性」

横浜国立大学非常勤講師 谷 憲治

コミュニケーション研究の新しい応用範囲として、文学などの文体論研究も挙げることができるが、いずれの方向に応用するとしても、コミュニケーションをとる二人もしくは複数人の間に介在する Intersubjectivity 「間主観性」が大きな役割を果たしていることに注目しなければならない。したがって、paralinguistics つまり言語以外の情報もコミュニケーションにとっては重要性を持っている。

(司会 早稲田大学教育学部助手 藤原 雅子)

1996 年

第51回例会 (1996.1.13. 於早稲田「セミナーハウスきむら」、以下同じ)

研究発表なし

第52回例会 (1996.3.11.)

「三つの大学“服飾”劇について (Three University Plays on Clothing)」

国士舘大学非常勤講師 加藤 誠

1610 年前後に作られた比較的短い作者不詳 (ケンブリッジの学生か) の『長靴と拍車』(*Boot and Spur*)、『帯紐とカフ、褰襟』(*Band, Vuff and Ruff*)、『ガウンと頭巾、帽子』(*Gown, Hood, and Cap*)は、さまざまな階級や職種を象徴する服飾を擬人化し、作者の身辺の実態を活写している。『長靴』で口論していた定住者と非定住者とが突然和解するなど、それぞれ論争劇として瑕疵も多いが、スチュアート朝演劇の奥深さも窺われる。

第53回例会 (1996.4.14. 於中央大学駿河台記念館)

「言語教育におけるチョムスキー理論の意義」

横浜国立大学非常勤講師 谷 憲治

ノーム・チョムスキーはそれまでの行動主義や経験論による刺激-反応の言語習得プロセスに異を唱え、人間は有機体であるという前提の基に生来する内的言語習得能力に目を向け、人間の心理が言語習得の過程で深く関わっていることを指摘した点で、第一言語習得のみならず言語教育全体に意義深い影響を与えたということが出来る。

第54回例会 (1996.6.9. 於早稲田大学国際会議場、以下同じ)

「ヒーニーの詩」

東海大学非常勤講師 横田 肇

アイルランドのノーベル賞詩人シェイマス・ヒーニーの詩の中から、“Digging”, “The Digging Skelton”, “Bone Dreames”, “Seeing Things” の四篇を取り上げた。その理由として、これらの作品においてヒーニーのめざす叙事詩、いいかえれば歴史を筆で掘り起こし

現前化することの一端がうかがえるからである。そして、重厚でときに堅苦しいこのような詩作を、美しい韻律とやわらかなモチーフによって結晶化するヒーニーらしさもこれらの作品に備わっている。

「外国人とのコミュニケーション：ことばと文化を考える」

東海大学非常勤講師 小泉 裕司

外国人とのコミュニケーションにおいて最も重要で基本的な要素は「ことば」である。一般に語学学習(ここでは英語とする)は中学から始まるが、それより以前から学習することは効果的であるかという点と、学ぼうとする言語を使用する国の知識も平行して学習を進めること：(1) 図書や種々のメディアから得る。(2) 外国人と積極的に接する機会をもつ。(3) 旅行、留学を通して外国生活を経験する。の3点の必要性を主張した発表とする。

第55回例会 (1996.7.14.)

「再び *The Marble Faun* についての考察」

中央大学非常勤講師 小松 良江

ホーソンの最後の長編『大理石の牧神』は、プラクシテレス作の牧神像に姿が酷似し、性質もまた、この神話世界の生き物さながらであるイタリア人青年ドナテロが、殺人という大罪を犯し、罪の意識、悔い改め、巡礼の旅等を経て、キリスト教的意味における豊かな人間性を持つ人物となってゆく物語であるが、この牧神像という存在が提示する、ギリシャ・ローマ神話の世界観と、キリスト教的世界観とは、大きな隔たりをなすもののはずであり、後者が前者にまさるといふ認識が作品根底にある中で、ギリシャ・ローマ神話の世界観の、キリスト教的それへの移行がどのようになされているかについての一考察を発表した。

第56回例会 (1996.9.8.)

「エンディミオン」における神話エピソードの意味

早稲田大学教育学部助手 藤原 雅子

John Keats の *Endymion* にはギリシア神話にちなむ三つの恋愛エピソードが挟み込まれている。異なる愛の諸相は、折りにふれて旅路の果てを予告するとともに、主人公の精神的成長のきっかけを与えている。彼は段階をふんで新しい経験を重ねることにより、月姫を得るほどまでに成長していく。エピソードは、それぞれがつながりを持ちながら、ストーリーの本筋に積極的に関与し、主人公の探求の道筋に推進力を与えている。

第57回例会 (1996.11.10.)

「『リリカル・バラッズ』の出版背景と女性作家と女性読者」

茨城県立医療大学非常勤講師 小林 英美

『リリカル・バラッズ』(以下LB)の匿名出版の意図を、18世紀末の出版状況の側面から考察し、この匿名は女性作家がLB創作に関わったと疑わせる作為的行為であった可能性を述べる。その状況証拠として、女性作家に匿名出版が多く、購買層としても女性は重要な存在であったことを提示し、多大な購買層を獲得する目的も、匿名出版にはあったと推定できることを論じる。また妹ドロシー、J・ベイリー、C・スミスら女性作家と、ワー

ズワスの関係にも言及する。

第58回例会 (1996.12.8.)

「詩としての第16章—— A・シリトーの〈円〉と〈曲線〉について——」

東京立正女子短大非常勤講師 横田由起子

アラン・シリトーの『土曜の夜と日曜の朝』の第16章は、もともと詩として書かれたものを小説の一部としたものである。詩に対して行うような一字一句の音とイメージを分析し、第16章の元の主題を探ってみると、積極的な〈生〉への参加、人生を一人で戦おうとする決意が秘められていた。それらは〈円〉と〈曲線〉のイメージの凝縮と音の繰り返しによってじわじわと伝えられている。肺結核を患い絶望のために自殺まで考えた作者は、作家としての活路にすさまじいほどの希望を抱いていたことがわかる。

(司会 日本大学非常勤講師 奥井 裕)

「『エンディミオン』—— 従来の翻訳・解釈における若干の問題点について——」

拓殖大学非常勤講師 小林 正弘

以前キーツの『エンディミオン』における幾つかのイメージ分析を行った(本誌前号所収「『エンディミオン』第一巻の構造分析—— 支配的イメージ群析出の試み——」)結果、故斎藤勇博士をはじめとする邦人諸学究によるその解釈及び翻訳において、私の解釈と相容れない箇所に着目せざるを得なかった。これは詮ずるところ、ほんの二箇所にすぎないが、少なくとも私の『エンディミオン』解釈にとって枢要な意義を有する部位であった。このようなわけで、敢えて諸学究の学的遺産に対する再検討を試みた。

(司会 早稲田大学教育学部助手 藤原 雅子)

1995 年

第 41 回例会 (1995.1.22. 於早稲田「セミナーハウスきむら」、以下同じ)

「*Lyrical Ballads*第2版の構成」

早稲田大学教育学部助手

小林 英美

第 42 回例会 (1995.3.4.)

「ワーズワースの思想的成長」

早稲田大学大学院

長谷部龍文

第 43 回例会 (1995.4.2.)

「ミルトン『教育論』の現代的意義」

中央大学非常勤講師

大西 章夫

第 44 回例会 (1995.5.13.)

「エドモンド・ブランデンの自然観」

東海大学非常勤講師

横田 肇

第 45 回例会 (1995.6.11.)

「詩人ミルトンの自立」

中央大学非常勤講師

大西 章夫

第46回例会 (1995.7.8.)

「『嵐が丘』について」 早稲田大学大学院 田村 裕二

第47回例会 (1995.9.9.)

「アガペーとエロス——『情事の終り』を軸に」 国士舘大学非常勤講師 秋本 和子

第48回例会 (1995.10.8.)

「『オットー大帝』について」 早稲田大学大学院 加賀 岳彦
「アラン・シリトーの『土曜の夜と日曜の朝』について」 茨城県立医療大学嘱託 横田由起子

第49回例会 (1995.11.11.)

「幻想の境界論」 千葉工業大学非常勤講師 遠藤 徹

第50回例会 (1995.12.10.)

「*A Group of Noble Dames* について」 早稲田大学大学院修了 杉山 幸子
Thomas Hardy の短編集 *A Group of Noble Dames* をとり上げた。この作品は、論じられる機会こそ少ないが、その大半が、彼の後期の代表作である *Tess of the D'Urbervilles* と *Jude the Obscure* の間に創作されており、この二長編との関連は、特に技法的な面で重要だと思われる。例えば、男ばかりで構成されるクラブの面々が、もっぱら昔の貴婦人たちにまつわる物語を披露するという設定は、語りの問題に対する作者の強い関心を窺わせる。

1994 年

第29回例会 (1994.1.23. 於早稲田「セミナーハウスきむら」、以下同じ)

「ワーズワースにおける理性の意味」 早稲田大学大学院 長谷部龍文

第30回例会 (1994.2.27.)

「トニ・モリスンの *Beloved* について」 中央大学大学院 横山 孝一

第31回例会 (1994.3.20.)

「*Lyrical Ballads* の編成」 国士舘大学非常勤講師 小林 英美

第32回例会 (1994.4.17.)

「コーデリア像をめぐる『リア王』の異版対照研究」 国士舘大学非常勤講師 大西 章夫

第33回例会 (1994.5.15.)

「翻訳の良否—— A・オウエンを素材に——」 東海大学非常勤講師 横田 肇

第34回例会 (1994.6.19.)

「ディケンズの父親像」 早稲田大学大学院 杉本 一郎

第35回例会 (1994.7.17.)

「ホーソンの *The Marble Faun* のピューリタニズムとゴシック」
中央大学非常勤講師 小松 良江

第36回例会 (1994.8.21.)

「マクベスの魔女」 国士舘大学非常勤講師 越智 敏之
「グリーン文学に見られるキリスト教思想」 国士舘大学非常勤講師 秋本 和子

第37回例会 (1994.9.18.)

「触手論／テキスト論」 都立農芸高等学校教諭 遠藤 徹

第38回例会 (1994.10.23.)

「キーツの長篇詩の技法」 早稲田大学大学院修了 加賀 岳彦
「アラン・シリトーの『ドアの鍵について』」 早稲田大学大学院修了 横田由起子

第39回例会 (1994.11.20.)

「モームの『アリとキリギリス』を読む」 日本大学非常勤講師 奥井 裕
「Linking ‘r’ and intrusive ‘r’」 エセックス大学大学院修了 谷 憲治

第40回例会 (1994.12.18.)

「『ご降誕祭のどたばた晚餐』 (*A Christmas Messe*, 1619) について」
国士舘大学非常勤講師 加藤 誠

1993 年

第17回例会 (1993.1.17. 於早稲田「セミナーハウスきむら」、以下同じ)

「『ハムレット』の言葉遊び」 東海大学非常勤講師 神山 高行

第18回例会 (1993.3.7.)

「語り手としてのベロー」 中央大学大学院 新井 典子
「詩人のイメージ」 早稲田大学大学院 小林 英美

第19回例会 (1993.3.21.)

「Wordsworth's Life」 早稲田大学大学院 長谷部龍文

第20回例会 (1993.4.18.)

「Henry James の *The Golden Bowl* について」

武蔵野音楽大学非常勤講師 内山 知子

第21回例会 (1993.5.23.)

ジョージ・オーウェルの『ウィガン波止場への道』について

日本大学非常勤講師 奥井 裕

第22回例会 (1993.6.20.)

「ハーディーの恋愛詩について」

東海大学非常勤講師 横田 肇

「『オリヴァー・ツイスト』について」

早稲田大学大学院 杉本 一郎

第23回例会 (1993.7.18.)

「Henry Miller の自伝的契約」

パリ第3大学大学院修了(文博)

松田憲次郎

「Puritan Heritage の中の *The House of the Seven Gables*」

中央大学非常勤講師 小松 良江

第24回 例会 (1993.8.15.)

「『失樂園』における教育的機能」

国士舘大学非常勤講師 大西 章夫

「エドガー・アラン・ポウの『ウィリアム・ウィルソン』における同級生の正体」

早稲田大学大学院修了 竹内 一郎

第25回例会 (1993.9.19.)

「キーツの擬人法」

早稲田大学大学院 加賀 岳彦

第26回例会 (1993.10.17.)

「シェークスピアの『様式的な』劇 序説」

国士舘大学非常勤講師 加藤 誠

第27回例会 (1993.11.21.)

「マクベス夫人の牢獄」

国士舘大学非常勤講師 越智 敏之

第28回例会 (1993.12.19.)

「Murray Pomerance, *DECOR* について」

東京理科大学非常勤講師 宍戸絵里香

1992 年

第12回例会 (1992.3.23. 於早稲田大学戸山構内、以下同じ)

「‘spots of time’ 体験の外界と心情」

早稲田大学大学院 小林 英美

第13回例会 (1992.6.8.)

「現状への傾斜」

早稲田大学大学院 加賀 岳彦

「“The Road from Colonus” 研究」

早稲田大学大学院 内山 知子

第14回例会（1992.10.18. 於早稲田大学総合学術センター、以下同じ）

「『荒地』に於ける水圏」 東海大学非常勤講師 横田 肇

第15回例会（1992.11.15.）

「詩人ミルトンの出発 再説」 国士舘大学非常勤講師 大西 章夫
「キーツ ソネットからオードへ」 早稲田大学大学院 加賀 岳彦

第16回例会（1992.12.20. 於早稲田「セミナーハウスきむら」）

「囲われた隠れ家」 国士舘大学非常勤講師 大西 章夫
「道化服を着たジェームズ一世」 国士舘大学非常勤講師 越智 敏之

1991 年

第9回例会（1991.6.20. 於学習院大学）

「A. Pope 『人間論』の第二書簡から」 日本大学芸術学部非常勤講師 佐藤 豊

第10回例会（1991.9.28. 於早稲田大学戸山構内）

「*What was Mine* (1991)——*The Burning House* (1984) との比較を中心に」
目白学園女子短大非常勤講師 穴戸絵里香

第11回例会（1991.12.18. 於学習院大学）

「ウルフの『波』について」 日本大学芸術学部非常勤講師 中谷 久一

（付記） 第1回～第8回までの例大会の記録は残っておりません。

歴代会長（学会化後）

2008～ 植月恵一郎

歴代幹事長（学会化後）

2008～ 水野 隆之

歴代事務局長（学会化後）

2008～2013 大西 章夫

2013~ 奥井 裕

歴代関西支部長（学会化後）

2008~ 遠藤 徹